

中等一同を前に召し、「製紙の困苦のことを如何やうに思ふたか、余が平常一枚の紙をも苟且にしてならぬと誠しめたのも道理ではないか」といはれたので、一同はたゞ恐れ入り、平伏して退いたが、夫からは侍女等で濫りに紙を費すものがないやうになつたといふことである。

◎大江元就元旦の用意

元就公が、或る年の正月元日の早天に、手水をつかひ、うがひをして、東の方に向ひ、暫く黙坐してをると、近習の士が罷り出て、元三の御祝を召上らる、やうにと伺つたが、別にナントモ返辭がない、其の後兩三度言上すると、元就公は其の坐を立ち起り、嚴としていはる、に

は、一汝は元三を祝する道理を知らない、抑々世間の愚かなものは元日に恵方を拜み、昆布栗を取て屠蘇の酒を酌み、壽命長久子孫繁榮を祝して、別に深い考慮を持つて居ない、今我が志す所は、元日は年の始月の始日、始であるから、寅の一天より起きて、一年の工夫をするのである。例せば、去年から今年を思ふに、去年東國は五穀が熟して豊饒であつたので、民百姓も満足して、不意に兵亂は興らず、兵糧に事は缺がないが、西國の方は、水損旱損で、萬民も安堵の思ひをして居ない、されば假令兵亂の危い目に遭はないでも、其の艱難を救ふために、色々の手段を考へて、儉約を守らんければならぬ。ソレカラ又召仕ひの諸士へ觸渡す個條を案じ、雙方満足して、

儉素

國家安全の用意をなし、一旦緩急の事に出會しても、上
 下當惑をしない様にしてこそ、元日の祝となるのである。
 されば一年の計は春にあり、一日の計は寅にあり、一生
 の計は勤むるにあり、起きべき時に起きないで、其の日
 の用を缺ぐ様な事は、大將たる者の行跡でないといはれ
 たといふことである。

◎大閤秀吉の妙藥

大閤秀吉が百病の妙藥とて、左の語を示した。
 妙藥三味、天を恐れ、身を修め、儉を守る。
 禁物四味、禮なし、邪欲を用ひ、物に怠る、非を行
 ふ。

◎格言

- 天地節して四時成る。節するに制度を以てすれば、財
- を傷らず、民を害はず。易 經
- 乃の儉徳を慎み、惟永圖を懷ふ。書 經
- 恭儉は惟れ徳。同
- 國奢れば之に示すに儉を以てす、國儉なれば之に示す
禮記
- 川を節して人を愛す。論語
- 賢君は必ず恭儉にして下を禮し、民に取るに制あり。
孟子
- 節儉の要は、少許の利益に注意せんよりは、寧ろ少許
孟子

○の費用に注意するに如かず。 一圓を惜むよりも、寧ろ一錢を浪費せざれ。

ベーカー
ケート

忍 耐

前の立志のところで一寸述べておいたのであるが、近頃は、成功の秘訣くといふことが大變流行して、新聞にも、雑誌にも、著述にも、八釜敷稱へられ、世の青年諸子も、好んでこれらの記事を読むといふ風であるが、敢て悪いことではないけれども、秘訣といつたからとて、人間の思想以上に、何物か、示す特別の方法がある譯のものでもないから、他人の寶ばかりかぞへて、自分には一錢もえないといふやうな愚なことをせず、先づ一旦志をたてた以上は、それを成遂けるまで、ドンナ艱難辛苦に出遇つても耐へ忍ぶといふ心を養ふのが、何より肝要

忍 耐

なことである。

若も此忍耐力がなかつたならば、いかほど立派な目的を持つて居るにしても、中途で廢絶するやうな悲運を招かんければならぬのである。また中途で廢したならば、一生涯浮浪の身となつて、何等の値もなく、面白味もなく、遂に此世が厭やになつて、自殺するより外仕方がないやうなことになるのである。

世の中は、萬事萬端、濡手で粟の擱み取りといふやうに、容易く成功するものではない、必ず他人から誹りを受ける事もあり、耻辱を受けることもあり、又恨みもうけ憎みもうけるので、幾多の艱苦と危険は、自分の身の邊を取圍んでをるのである。それで是等の艱苦と危険を

忍ぶ偉大なる力がなかつたならば、とても其の志を成就することは出来ぬ。

人間といふものは、自分の情に適ふ事があれば喜び勇み、情に逆ふ事があれば怒り腹立つのである。これは天性であつて、十人が十人、此の心のないものはないのであるから、自分が常に尊敬して居る人、大切にしている事を、他人から侮り辱しめられたときは、大に之を耻とし、意氣を張るのであるが、是は敢て不當と云ふことは出来ぬけれども、かゝる折にも、先づ自分の念頭を鎮め情波を澄し、明白に事理を辨へた上で、相當の處置をとらんければならぬ。激怒に乗じて、大聲をあけ、あらあらしく人を罵り、又は蠻行に及ぶときは、爲めに不測の

禍を招くに至るのであるから、惣じて順境であるからとて油断をせず、逆境であるからとて暴舉妄動せず、鞏固なる忍耐力を以て、目的地に進まんければならぬ。之を譬へていふならば、彼の深い山奥から流れて出る溪水が、或るときは巖石に障礙ぎられ、あるときは兩岸に衝突つても、流れくゞて遂に茫々たる海洋に達するやうなもので、實に忍耐力より強い者はなく、成功の秘訣もまたこの二字に存するのである。

◎大石良雄の忍耐

元祿年間、播州赤穂の城主淺野内匠頭が、殿中で拔刀した科で、其の國を取り上げられた際、赤穂の老臣大石

良雄は、飄然と江戸の地を去つたので、心ある者は、良雄に復讐の志があるのを悟り、其の評判は都鄙に傳つたのである。良雄は大變其れを心配して、これでは仇敵の吉良上野介がキツト油断せないだらうと思ふて、自分等に復讐の心がないといふことを知らせるため、故と遊蕩三昧に耽つたのである。或る日、京都島原の妓樓に登つたとき、喜劍といふ薩摩の人も、同じ其の樓に居つたのであるが、喜劍はまだ良雄と一面識もないが、かねて良雄の人物を聞いて居つたので、彼れはキツト主君の仇を報ゆるであらうと信じてゐるが、何ぞ圖らん、良雄が登樓して、妓女と戯れて居るのを見て、不愉快でならぬから、私かに良雄を一室に招いて、優しく復讐のことを諷

忍耐

したが、良雄は何とも感じた様子がないので、今度は剥出して直言勧告したが、良雄は毫も承服した様子がないのみか、高笑をして、言ひたいことを吐き出すので、喜劍は大に立腹し、「汝は人面獸心である。主人は切腹し、國は取り上げられたにも拘はらず、汝は家老でありながら仇を報ゆることを知らない。畜生でなくて何であらう、汝は畜生であるから、畜生のやうに汝を待遇つてやらう」と罵りつゝ、左の足を良雄の前に突き出し、魚肉を足の指に狭んで、良雄に食はせると、良雄は少しも驚かず、首を垂れて其の肉を食ひ、そのうへ舌を出して喜劍の足の指を嘗めたので、良雄の笑ふ聲と、喜劍の怒る聲とで、一時は樓外に聞へたといふ程であつた。それから一年餘

を過ぎて、喜劍は藩命を佩びて、江戸に上つたが、丁度其の時、赤穂の義士が仇伐をして、同志の者が四十七人、大石良雄は其の首謀者であるといふことを聞いて、喜劍は大に驚き、先程良雄の心を知らないので、彼れに耻辱を與へたのを後悔し、「我が良雄を畜生と見たのは、我が目の罪である。我が良雄を畜生と罵つたのは、我が口の罪である。我が良雄に、足で魚肉を食せたのは、我が心の罪である。我が良雄を畜生同様待遇つたのは、我が心るより外に道がない」と覺悟を定め、早速偽病氣をこしらへて郷里に歸り、公のことなど事務を處理して、江戸に来て見ると、其の時、良雄等は既に切腹を仰せ付

したが、良雄は何とも感じた様子がないので、今度は剥出して直言勧告したが、良雄は毫も承服した様子がないのみか、高笑をして、言ひたいことを吐き出すので、喜劍は大に立腹し、「汝は人面獣心である。主人は切腹し、國は取り上げられたにも拘はらず、汝は家老でありながら仇を報ゆることを知らない。畜生でなくて何であらう、汝は畜生であるから、畜生のやうに汝を待遇つてやらう」と罵りつゝ、左の足を良雄の前に突き出し、魚肉を足の指に狭んで、良雄に食はせると、良雄は少しも驚かず、首を垂れて其の肉を食ひ、そのうへ舌を出して喜劍の足の指を嘗めたので、良雄の笑ふ聲と、喜劍の怒る聲とで、一時は樓外に聞へたといふ程であつた。それから一年餘

を過ぎて、喜劍は藩命を佩びて、江戸に上つたが、丁度其の時、赤穂の義士が仇伐をして、同志の者が四十七人、大石良雄は其の首謀者であるといふことを聞いて、喜劍は大に驚き、先程良雄の心を知らないので、彼れに耻辱を與へたのを後悔し、「我が良雄を畜生と見たのは、我が目の罪である。我が良雄を畜生と罵つたのは、我が口の罪である。我が良雄に、足で魚肉を食せたのは、我が心の罪である。我が良雄を畜生同様待遇つたのは、我が心るより外に道がない」と覺悟を定め、早速偽病氣をこしらへて郷里に歸り、公のこと私のことなど事務を處理して、江戸に来て見ると、其の時、良雄等は既に切腹を仰せ付

忍耐

けられて、泉岳寺に葬つた後であつたので、喜剣は直ぐに泉岳寺に行つて、恭しく良雄等の靈を弔ふて、「我は地下に於て罪を謝せん」と云ひつゝ、刀を抜き、腹を屠つて、良雄の墓前に死んだといふことである。

◎ソクラテスの忍耐

希臘の大哲學者ソクラテスは非常に堪忍づよい人で、平生友達に、「私が怒るやうなことがある場合には、遠慮なく注意をしてくれよ」と頼んで置いたのである。それによつて、短氣を起し、怒り腹立つ様な場合に、友達から心付を聞くと、初めは聲を低ふし、次第に口を閉じて、無言になるのが常であつた。或る時、氏が召使の下

人に向つて、大變立腹したことがあつたが、ソクラテスは怒りを取鎮めて、「若し私が怒つたならば、キツト汝を打つたであらう」と云つた。又或人が平手で氏が鬚の處を打つた、か打つと、氏は笑つて、「兜を被着なかつたのが我の不幸である」と云つた。又或る時、友達と同道して、市中を往來せしに、一人の紳士に行違ひ、氏は叮嚀に挨拶したが、彼の紳士は素知らぬ顔で過ぎ去つたので、同行の友達はこの有様を見て、「彼の男は無禮千萬な奴である。この儘には捨て置かれなさい」といふと、氏は靜に、「卿等は途中で見苦しい服装の人に逢つても、之を責むることは出来まい、それと同じやうに、卿等より心術のよくない人に逢つたからとて、之を責めねばならぬ道理はないで

はないか」と答へた。ソクラテスの夫人エキサンチップは古今無類の疔癩持ちで、殆ど狂婦といつてもよい位であつたから、氏は常に亂暴無法の待遇を受けたのである。一日、エキサンチップは些少の問題からして、氏に對して大に立腹し、往來の道で、氏につかみかゝり、其の羽織をひき裂いたので、氏の友達は見るに見かね、「いかにも亂暴極まる振舞である、このまゝ、打ち捨て、は後日の爲めにならぬから、痛く鞭つて懲らされよ」といふと、ソクラテスは、成程面白い門芝居であらう、卿等は、私と妻と櫻闘するところを見物してをれば、如何にも面白い一段のなぐさみであるであらう」と云つて、少しもとりあはなかつた。又或る時、夫人が餘りに疔癩を起し、ドウ

しても鎮まらなかったので、氏は部屋から出て、戸の外に立つて居たが、夫人は、氏が落ち付き拂つて居る様子を見て、一層烈火のやうにいらだち、二階の梯にかけ上つて、さうきん桶をさかさまにして、濁水を良人の頭に灌ぎかけた。けれども氏はビツクリともせず、からく笑つて云ふには、「こんなにはけしい雷鳴の時には、驟雨が降るのは當然である」と。

◎韓 信

漢の韓信は、淮陰の人である。家は至つて貧乏なので、以前下郷南昌の亭長のところに寄食して居たが、亭長の妻が之れを苦しめたので、韓信は、其の家を去つて、城

下に釣をして居つた。偶一人の老婆があつて、其の有様を見て氣の毒に思ひ、數十日の間、御飯を食べさせた。或る日のこと、韓信は、老婆に向つて、「後日キット此の厚恩に報ゆるであらう」といふと、老婆は怒つて、「大丈夫たるものが、自分で食ふことが出来ず、實に不慙でならぬから、斯うして衣食させたのである。ドウして汝から報をうける様なとを望まうぞ」といつたと云ふことである。が、當時韓信の寒貧も之れで知れるのである。ソレカラ又淮陰の少年が侮て、一身體は長大く、刀劍は帯びてゐても、中情は怯い奴である。若し美事死を恐れなければ、我々を刺し殺して見よ、又死ぬることが出来ないならば、跨の下を潜れ」といつたが、韓信は此の少年の侮辱を聞い

て、ジツト視て居たが、やがて少年の跨をくゞつて出たので、市中の者は皆な韓信を笑つて、卑怯者としたといふ。されど後には漢の大將と爲り、高祖を佐けて、楚の國を滅し、天下を定めたので、世の人々は、韓信の忍耐力の強いのに感じ、其の人物を譽めないものはなく、蕭何、張良と併せて、天下の三傑と稱するに至つた。

◎張公藝

唐に張公藝といふ徳者があつた。或る時、高宗が其の宅に行幸せられて、公藝を召し、「二族の者が和睦するに、はいかやうにしたらよいか」と問はれた。スルト公藝は「紙に書いて、答へ申しませう」といつて、忍といふ字を百

忍耐

餘り書いて進上し、其の意を述べていふには、「宗族が一致協和しない所以は、身分の尊い者に衣食が均しくないことがあつたり、又卑い者に禮節が備はらないことがあつたりして、互ひに責め合ふから、遂に争ひをする様になるのである。苟めにも相與に忍び合ふ心があつたらば、不足の念は起らず、家道は睦くなるものであります」と。

◎伊藤仁齋

伊藤仁齋は、京都の人で、其の家は代々商賈を業として居つたのであるが、仁齋になつてから始めて儒學を治め、刻苦自ら勵んだのである。デ親戚の者は之を阻んで、「儒者になるよりか、お醫者になる方がよい」と色々忠告をし

たが、仁齋は其の勸告に従はなかつた。ソレカラして家は益々貧乏になつて、人の勸告も一層甚しくなつたが、仁齋は志を執ること益々堅く、後遂に大儒と爲つた人である。或る時、歳暮になつて、糶糶を得ることが出来ないので、妻は跪いて、「家道の艱難は如何程であつても、妾は固より甘んじて居りますが、忍びないのは何も知らない子供であります、隣家に餅のあるのを見て羨み、連りに強請つて已めませぬ。口では呵責つて見るもの、妾の腸は斷れるやうであります」といつて、涙を流すので、仁齋は机に凭つて書見をし、黙つて何も言はなかつたが、早速著て居る上衣を脱で、妻に渡したといふことである。

◎松平信綱

松平信綱が武藏の川越を領して居たとき、領内に野火止といふ邑があつたが、土地は瘦せ水は少く、丸で野原の様であつたので、代官安松金右衛門が建議して、「ドウか新しく梁を鑿つて、玉河から水を引き、稻田を開拓したいものである」といつた。ソコデ信綱は其の費用を尋ねると、三千兩程かゝるといふから、「考へて見ると、私は此に久しく居るものではないが、三千兩で後々の人を利益すると云ふことであれば、ソレハ私の爲すべき本務である」と、早速命じて其の事を監督させた。ソコデ金右衛門は數百人の役夫を集めて、小川村から新河岸まで十六

もある長い梁を鑿つたが、水は來ず、梁の中がすこしうるおうばかりであつた。信綱は不思議に思ふて、其の譯を詰ると、金右衛門がいふには、「臣も其の理が解りませんどウカ來年迄待ちませう」と、明年になつても矢張水は來ない、信綱は又金右衛門を責めて、「汝は特に地勢の高低を察しないから、それで、あらう」といふと、金右衛門は、「イヤ決して左様なことは御座らぬ。臣は今になつて悟りました。ソレハ古に河潤九里といふことがあります。今此の土地は武藏曠漠の中にあつて、土は燥き風は多く、砂塵は吹いて座敷に入り、お客が來る毎に席を掃ふのであります。今年ばかりはそうでなく、野菜の出來も、前日と大變違つて參りました。是れは河水の潤が土地に

忍耐

入ることが深いのでありませう。シテ見ればタツタ今水
 が来るに違ひありませぬ」と答へた。其の明年、或る夕大
 雨が降つて、其の聲は雷のやうであつたが、俄に奔流衝
 決して、十六里の新河は一時に満水した。ソコデ信綱は
 大に喜んで、「金右衛門が三年の永い年月の間、志を挫か
 ずして、其の工事を監督したのは、洵に感賞すべきもの
 である」といつて、其の祿を増し、後には立派な官職に就
 かしめたといふことである。凡べて何事でも、忍耐力が
 なくては、決して成功するものでない。

◎格言

○それ忿恚は、速かに能く百千大劫に集むる所の善根を

損害す、このゆるゑに、忍辱の鎧を被、堅固の力を以て、

佛 經 忿恚の軍を摧くべし。

○忍辱は十力のもと、諸佛神通の原なり、無礙智大悲は、

佛 經 皆忍を以て本と爲す。

○忍の徳たるや、持戒苦行も及ぶ能はざる所、能く忍を

佛 經 行するものは、すなはち名けて有力の大人と爲すべし。

佛 經 もしそれ惡罵の毒を歡喜忍受して、甘露を飲むがごと

佛 經 くすること能はざるものは、入道智慧の人と名けず。

○十千の敵に對し、一夫にしてこれに勝つとも、未だ自

佛 經 らに勝ち忍ぶの上なるに若かず。

○必ず忍ぶことあらば、其れすなはち濟すことあり。

忍 耐

○速すみやかならんことを欲ほつすることなかれ、小利せうりを見ることなかれ、速すみやかならんことを欲ほつすれば達たつせず、小利せうりを見れば大事だいじ成ならず。

○小せうを忍しのばざれば則すなはち大謀たいぼうを亂みだる。 孔こう 子し

○天將てんまきに大任たいにんを是この人に降くださんとするや、必かならず先まづ其その心志しんしを苦くるしめ、其その筋骨きんこつを勞ろうし、其その體膚たいふを餓がし、其その身を空乏くうぼうにし、其その爲なす所ところを拂亂ほうらんす、心こころを動うごかし性を忍しのびて、其その能あたはざる所ところを増益ぞうえきする所以ゆえんなり。

○忍にん耐たいは、劇劑げきざい中ちゆうの至劇しげきなるものなり、何なんとなれば失望しつぼうと云いへる巨人きよじんをも殺ころせばなり。 孔こう 子し
ダグラス、ジェロルド

○忍耐にんたいは、信心しんじんの甲冑かちゆうにして、其その勝利しょうりなり。

チャイリツテ、ヤング

○之これを改あらためんと欲ほつするも、力ちから及およばずんば之これを忍しのべ、然しからば稍や之これに堪たゆることを得うべし。 寂じやく 念ねん

○深ふかきよの窓まどうつ雨あめに音ねせぬは、うき世よを軒のきのしのぶな

寂じやく 念ねん

○ふまれても根ねづよく忍しのべ路みちしばの、やがて花はなさく春はるを

讀人不知よみじんしち

○わがためにうきをしのぶのすり衣ころも、みだれぬいろやこ

伊い 信しん

○うきことのなほこの上うえにつもれかし、かぎりある身みの

鹿か 之助しすけ

忍耐

廉 潔

古人の言に「渴しても盗泉の水を飲まず」といふてあるが、此語は最も簡明に、最も適切に、廉潔の意味をいひあらはしてある。

凡て、人間といふものは、誰れしも富貴を望まぬ者はない、人よりも多く財産を持ち、人よりも貴い地位を得て、幸福な生活を遂げたいと云ふのが、一般の人情である。けれども情欲は猛烈なる火の如きもので、放任して置くときは、遂に自他の人命をも焼くので、實に恐ろしいものである。それであるから理性の水を以て、此恐るべき情欲の火の勢力を防禦して行かねばならぬ。

いかにお金が欲しいからとて、他人の倉庫に穴を明けてはならぬ。いかに貴い位が得たいからとて、他人の椅子を奪取つてはならぬ。と云ふ様に、道義の觀念を以て、自己の精神及行爲を律して行くのである。かくすれば如何なる榮利の境に出會つても、決して誘惑に溺れるといふことはない。是れが即ち廉潔の徳である。

廉潔とは、清廉潔白と熟字して、吾人の精神が、清水のやうに、綺麗なのを云ふのである。精神の綺麗なのは、貪欲の心を起さぬので、爲すべからざることを爲し、取るべからざるものを取るといふ如き、我欲私心を離れるのである。しかすれば自己は縦し貧賤洗ふか如き境にありても、精心の中は、常に清明徹、仰いで天に慚ぢ

廉 潔

ず、俯して地に愧ぢず、毫も疚しいところはないのであるから、不義にして鉅萬の富を得て居るものよりも、無道にして高貴の位を得て居るものよりも、遙かに精神上の悦樂と満足とを得て居るのである。既に精神上の悦樂と満足とを得れば、富何物ぞ、位何物ぞ、畢竟浮雲の如きものである。

古來、我國には武士道なるものがある。武士道には、忠義、孝行、節操、勇武、仁愛、禮讓等の幾多の要素があるが、廉潔も亦是等の要素と相並んで、我國民の一大精神となつて居るのである。此精神あればこそ、東洋の君子國として、一段の品位を高むることが出来るので、苟も此道徳を無視し、貪欲の心を逞ふしたならば、義を

傷り、道を害ひ、子としては親に不孝となり、臣としては君に不忠となり、武士道の精神は地に墮ちて、汚名を千載に遺すことになるのである。されば我國民は、此廉潔の徳を養ひ、身を富貴功名の外に脱して、精神上の悦樂と満足とを得ることに務めなければならぬ。

◎頼春水の廉潔

頼春水といふ人は、何事にでも勤勉であつて、文人疎慵の風習はなかつた。家内を治むるにも、器什をキチンと片付け、帳簿なども明晰にして、無用の故紙でも綺麗に整へて決して棄てず、儉素を主として、些細な事も苟

廉潔

にするといふことはなかつたのであるが、此等儉約家が往々にして陥り易い吝嗇といふ弊は寸毫もなく、つとめて故舊を撫し、貧困者を恤んだのである。氏が死ぬる二三年前のことであつたが、或る門人に手紙を出して、「我が亡後にこれを披け」とあつたので、後になつて披いて見れば、具さに死後の事を處分してあつた。「二本の刀と一本の槍は家の舊物である。藏書は我が若いときから辨じておいたもので、我が膏血であるから、子孫たるものはこれを愛護せんければならぬ。他の物は惜むところはない。又廉潔の二字は我が家の精神である。吾が死んだ後、眷族の者で汚名を得ると、即ち祖徳を汚すのである。この外には別に心配することはない。また某の物を借りた

のは返し、買つたものは値を拂はんければならぬ」と、細かに記して洩す所はなかつたといふ。

◎天野康景

天野康景は、徳川氏に仕へて、一萬石の祿を受け、興國寺の城に居つたのであるが、或る時、一室を建築しようと思ふて、澤山材木を集めて、準備をして居ると、連りに其の竹木を盗む者があるので、兵卒に言ひ付けて夜番をさせた。スルトある晩のと、案の如く、一群の盗人が遣つて來たので、守卒は刀を揮つて、彼等を逐ひかけ、一人に負傷をさせた。此の盗人は徳川氏の邑民であつたが、負傷者は代官に訴えて、「天野氏の兵卒と喧嘩して、

廉潔

斯様に負傷致しましたから、何分宜しく處罰をして下さるやうに」と申し出たので、代官を勤めて居る井出甚介は、直ぐに人を康景の處へ遣つて、「擅に公邑の民を傷ふといふのは、實に承知ならぬ振舞である。早速犯者を出す様に」といふてやると、康景は之に對して、「盗人を見て之を殺すのは定例であつて、別に不思議なことはない、彼の輩は頻りに我の竹木を盗みに來たが、我が彼の輩を手にかけて誅することが出來なかつたのは實に恨事である。デ兵卒は我が命令を受けて、夜番をして居たのであるが、盗人が來たので、之を撃退したのは、當然のことで決して罪はない。それゆゑ犯人は遣ることがならぬ」と返事をしたので、傷者は遂に之を家康に訴へた。ソコデ康景と

甚介とを呼んで、事の次第を尋ねると、皆前に言つた通りを主張して、何れとも決しなかつたから、家康は心の中で、「康景は偽を言ふ様な人物ではない、偽は或は訴へた者に在るであらうと思ふて、命令して其の訴訟を罷めさせ、本多正純を康景のところへ遣つて、内々事の顛末を探らせた。デ本多は、康景のところへ行つて、「兎に角彼の訴者は公邑の民であつて、貴殿の兵卒は私の人間である。私の義を押立て、公威を害するといふことは甚だよくないことではないか」といふと、康景は、「タトヒ公の事に關しても、正直を枉けて、曲つた道につくと云ふことは、私には到底出來ない、又我が兵卒は賤しいけれども、決して罪のあるものでない。デ枉けて彼の兵卒を

殺すよりか、イツソ我が死んだ方がよい」といつて、遂に城邑を棄て、出て往つたといふことである。實に潔白な精神ではないか。

◎紀夏井

紀夏井が讃岐の守と爲つたとき、國中は能く治つて、官吏も人民も、皆其の徳に歸服をして、誰一人欺く者はなかつた程であつたので、任期になつて、歸つて來るときにも、百姓共が官邸に來て、頻りに留任を乞ふので、更にまた二ヶ年程留ることとなつた。其の間、夏井の施政がよかつたものであるから、人民は富み、倉庫は實つると云ふ按排になつたので、其の部内に四十棟の大藏を

造り、其處へ糶を納めて、不動の貯蓄をさしたのである。それ程であるから任期になつて歸へるときに、吏民から澤山の贈物をしたが、一も受けないうで、都に歸つてから、其の家に贈物を届けたが、夏井は唯紙筆丈を受けて、其の餘の品は残らず還へしたといふことである。

◎橘良基

橘良基といふ人は、五州に歴任して、治績もあり、功勞も一通りでなかつたのであるが、職を辭して歸つて來る度に、少許の資糧をも持つて來なかつた。ソシテ常に子孫に向つて、人間といふものは自分の行を潔白にせなければならぬと教へたのである。或る時のことであつ

廉潔

たが、子の在公が、國を治むるには如何様にしたらよいかと、其の術を尋ねると、良基は答へて、「サヨ一治國の術には種々あるが、清潔と云ふことが、何より大切である」といつたといふことである。その位良基は潔白な者であつたから、死んでも、別に家に貯蓄はなく、中納言在原行平が、絹布を贈つたので、ヤット葬式をしたといふことである。

◎許衡と梨

元の許衡が、或る時暑中に、河南を過ぎた時、あまり咽喉が渴くので、大勢の者は路傍の梨を取つて喰ふたが、許衡は獨り樹の下で休息して居るので、或人が「ナゼ梨を

喰はないかと尋ねると、許衡は、自分の所有でないものを取つて喰ふのは不可ない」といつた。ソコで或人は、「今世の中は亂れて居て、此の樹は誰の者やら主は無いから、差支ないではないか」といふと、許衡は、「決して左様でない、ヨシ梨の樹には主人がなくても、吾が心にチャント主人があるから、良心に満足をしなないものは、塵一つも取ることはならぬ」と答へた。許衡の家は貧乏であつたが粟の出来るときには、粟を食べるし、其れが出来ないとときには野菜を食べて居て、少しも不平の色なく、泰然として生活をしたのである。ソシテ少しでも餘財があると、親族の者を始め、世の貧書生に分つと云ふ風で、人から物を遣つても、義に違へば決して受けなかつたと云ふこ

とである。

◎格言

○其の義に非ず、其の道にあらざるや、之に祿するに天下を以すれども顧みず、繫馬千駟も視ざるなり。其の義にあらす其の道に非るや、一介も以て人に與へず、一介も以て人に取らず。

孟子

○以て取る可し、以て取ることなかる可し、取れば廉を傷る。

同

○簡にして廉。

書經

○一に曰く、廉善、二に曰く、廉能、三に曰く、廉敬、四に曰く、廉正、五に曰く、廉法、六に曰く、廉辨。

周禮

○富と貴きとは是れ人の欲するところなり、其の道を以せずして之を得ば居らず、貧きと賤きとは是れ人の惡むところなり、其の道を以せずして之を得れば去らず。

論語

○不義にして富且貴きは、我に於て浮雲の如し。

同

友愛

廣い意味からいへば、天地同根萬物一體で、四海の内
皆同胞兄弟ならざるはないから、甲も、乙も、丙も、丁
も、知るも、知らぬも、互に親切を盡し合ふといふこと
は、道德の美であるが、物は近きより始むるのが順序で
あるから、先づ己が親族に對して、親切を盡すべきであ
る。而して親族の中で、孝養の事は、前に既に述べて置
いたから、今は友愛について、一言しようと思ふ。
兄弟は、年長者と幼年者との區別こそあれ、其の本を
質すと、一體一支であつて、俗に謂ふ、水入らずの關係
である。ソシテ同じ膳の飯を食ひ、同じ家に育ち、同じ

場處に遊び戯れ、同じ父母の恵をうけて成長するもので
あるから、互に相愛して、仲善く暮さんければならぬ。
友愛は、各自の精神に於て、非常に愉快を感じるばかり
でなく、他人からも愛敬をうけて、最も幸福なる生活を
遂げることができるのである。
然るに、若しも之に反して、兄弟和睦せず、常に鬩牆を
すれば、各自の良心の内では、不満足を覺え、父母親族
には大なる迷惑をかけ、社會よりは遠ざけられて、不幸
なる生涯を招くばかりでなく、遂に一家の滅亡を來たす
やうなことになる。
世間には、兄弟喧嘩をして、恥を恥とも思はぬ輩が往
往あるが、其の鬩牆の起因は、多くは家督相續にあるや

友愛

うである。家督相續の事は、國によつて、習慣、制度を異にし、個人間に於ても、亦特殊の事情があることもあ
るから、一概に批定する譯にはゆかぬが、併し道德上か
ら云へば、其の條件が何如であらうが、其の理由が那邊
にあらうが、兄弟間の不和は、絶對的に不道德であるの
である。何故かとなれば、是等の諍擾は根本的に友愛の
情理に違背するからである。

試みに思へ、血肉を分けたる兄弟が、權利、義務を主
張して、ヨシ巨鉅の富を得たものがあつたとしても、人
は、其の伶俐を褒めないで、寧ろ茅屋破窓の下に、苦樂
を共にせる兄弟があるのを見て、其の愛情の厚きに感ず
るではないか。物質は一時の榮華であつて、而して友愛

は千古の情理である。されば世の兄弟姉妹よ、其の理を
念ひ、其の情を盡して、以て精神的の幸福を得よ、是れ
實に人倫の大義である。

◎北條泰時

北條泰時は、至つて友愛の厚い人であつて、嘗て評定
所に居たとき、寇賊共が、弟朝時の宅を圍んだといふと
を聞くと、早速徑から馳せて行つて之を救助したのであ
る。ソレカラ歸つて來ると、平の盛綱が諫めていふには、
「公は天下の爲めに少し自重せられんといかぬ。輕卒に難
に行くといふのは宜しくありません。よし朝家の寇賊で
あつてもが、先づ敵の形勢を覘つて、之が方略を爲さな

ければならぬ。其の時には、盛綱等は命を奉じて事を辨
 ずるでありませう。今後注意せられんと、恐くは他の譏
 を招き禍を來すでありませうといへば、泰時は「人間と
 云ふ者は、親しい者を親しむと云ふことが何よりも大切
 なものである。敵が私の弟を殺さんとするに、坐視して
 救はなかつたら、其れこそ天下の譏を招くのである。朝
 時が寇に圍まれたのは、他人から見たら、小事でもあら
 うが、我の身に取っては實に大事であるといつたので朝
 時は之を聞いて、益々敬重したといふことである。

◎石野兄弟の友愛

石野權兵衛、弟市兵衛兄弟は、京都西洞院の東の桔梗

屋といふ商家であるが、兄弟ともに學問が好きで、堀川
 の流義を敬慕したのである。その上兄は佛學を好み、殊
 に三論に通達したが、弟は本草に委しく、又畫を能した。
 ソシテ兄弟とも音楽が好きで、音楽のある所へは如何に
 遠路でも必ずつれだちて行つたのである。友愛の情は一
 方ならず深く、兄が妻をもらつた後も久しく同居した
 のであるが、弟が學問の爲め外出し、夜遅く歸るときも
 戸く敲くといふことはない、纔に咳をすると、兄は早速
 聞つけて戸を開けるのが常で、もし聞つけないと、朝ま
 で門に立つて居るといふ風である。母が死んでから五十
 日間は、其墓所鳥部山に、毎曉必ず参詣して、香花を供
 へ、兄弟伴れで一日も缺かしたことはない。死後でも斯様

友愛

であるかあら、生前の孝養推して知るべきである、市兵衛
 は一甫といひ、後同じ街の裏家に別居して、獨身で住ん
 だが、夏でも冬でも頭を物でつゝみ、すびつの上に櫓を
 覆ふたのを、机にかへて書見をした。伊藤東涯、松岡立
 達たつの二先生が、折々にははれて話をせられる外、世間に
 知つた人はすくなかつた。草廬龍翁がまだ幼くて、學問
 をしたのは、此の一甫の勧めによつたといふのである。

◎板倉勝重金を出して交を結ぶ

勝重が所司代となつた時、或る人が黄金三兩を拾ふて
 之を訴へたので、勝重は此の事を通街に掲示すると、其
 の遺主が出頭して、「我が金を捨て、彼の人がこれを拾

ふのは、皆天の然からしむるところであるから、私は此の
 金は取らない」と、いつて受取らず、拾つた者も亦受けず、
 相譲つて決しないものであるから、勝重嘆賞していふに
 は、「是れは所謂堯舜の民である。圖らずも予が叔世に生
 れて、此の様な訴を聴くを得たのは、實に予の幸である。
 これを紀念として以後交を結ばう」と、自分で金三兩を出
 し、併せて六兩として、之を三分して各々二兩を取り、
 且ついふには、「汝等二人は兄弟の如く親しんで、如何な
 る事柄でも、言ひたいことがあれば、必ず來て予に告げ
 よ」と、厚く慰めて之を選したといふことであるが、かゝ
 る潔白な精神を以て交はつたら、其の友愛の情は千古に
 變るものでない。

◎メリー、カライル

エミリー、ハットラー、ポンソンビーと云ふ二人の貴婦人は、本國から連れて來た、メリー、カライルと云ふ一人の婢と共に、ウエルスと云へる處に住んで居たが、此メリー、カライルは、二人の幼い時より仕へて、大變忠實で、二人を大切に勤めたので、二人もメリーを友だちの如く思ひ、いと睦じく暮して居る中、今は三人共に年老つたので、一基の石碑に、三人の碑銘を刻まうと、ランゴレンと云ふ墓地に、三角の石碑を建てたが、メリーが先きに死んだので、其處に葬り、二人の好みにまかせて、石碑の一面に碑銘を刻んだ。其の後二人も程なく

死んだので、メリーの側に葬り、石碑の残つた兩面に、二人の碑銘を記した。斯して三人ともに種族は異なつて居り乍ら、互に相親しみて一生を送り、死しても一基の石碑の下に葬られたのは、實に稀なる例である。又彼の、英王ジョージ三世にも、年久しく、いと忠實に仕へた一人の婢があつたが、死後に至り、ウ井ンドソンのセント、ジョージと云ふ禮拜堂の側に墓を建て、そのかたはらに大きな紀念碑を立て、大變莊嚴な銘を刻んで、その忠實を旌表はさたれと云ふことである。

◎葡萄牙人牙の兄弟

今を距ること、四百年ばかり以前の事であるが、東印

海水が注ぎ入るのをつくらう用があるので、籤をひく數に入らず、船長は、固より重い役があるからとて、これも籤より除かうと、一同から云ひ出したので、我一人さうは出来ない、稍暫くの間は承諾しなかつたが、衆人の言に敵しがたく、遂に承諾すると、今は十六人の中から四人死すること、なつた、斯くて四人の中、三人は、宗旨の禮式に従つて、最後の祈を終つて、潔く海中に飛び込むのだが、今一人は、葡萄牙の紳士で、兄弟共にこの艇にあるので、弟は、今しも兄が艇から飛び下りんとするを見て、しかと抱き止め、兩眼に涙を浮べ、卿には妻子あり、又三人の妹もあつて、卿に頼り居る大事の身、私は獨身で、さしたる累もなければ、卿の代りに私をと乞

ふと、兄は斯る場合に如何なる人にせよ、他人を身代に立てることは不義の至りである。まして骨肉最愛の弟を、ドウして身代に立てられやうと、聞き入れなかつたが、弟は跪いてしがみつき、引き分たうとしても放さない、兄は語を續けて、「卿は生き残つて、吾が子供等の父となり、吾が妻を助け、吾が財産を受けとつて、妹たちの成育をたすけてくれ」とさままゝに言つたが、更に聞き入れず。暫の間は、互に死を争ふたが、兄は、弟のいと切なる心を仇になしがたく、遂にその願にまかすと、弟は直ちに水中に飛び込んだ。けれども游泳に熟練して居たので、忽ちにして艇にとりつき、片手にて舵の柄を捉へた、すると、一人の水夫が腰刀で其の手を斬りをとしたから、

水中すゐちゆうに落ちたが、一生いつしやう懸命けんめいの力ちからをふるつて、再びまた片手かたてで艇ふねの端はしを捉とらへたので、又また斬きり落おされた。斯かくて猶なほ兩足りやうそくと、斬きられた兩手りやうてで泳およぎつつ、水面すゐめんに浮うかんで居ゐるが、艇中ていちゆうの人々ひとびと此狀このさまを見て、兄弟きやうだいの恩愛おんあいを思おもひやり、不愍ふびんの情じやうに堪たえかね、彼れ一人ひひとりのことなれば助たすけてやらうとて、遂つひに救すくひあけて、さまざまに手當てあてを施ほした。かくて終夜しゆうや漂たひ流ながれて居ゐつたが、未明みめいの頃ころ、漸ようやく一つの陸地をかを見出みした、こは葡萄牙ほるごがるの殖民地しよくみんちより程遠ほどこほからぬ、亞非利加あふりかのモーザムビクイムビクイと稱しやうする山やまであつた。其處そこに着ちやくして、止とり居ゐる中うちに、リスボンリスボンより次便じびんの船ふねが、其處そこを通とほつたので、それに乗のり移うつり、恙つかなくゴアゴアに着ちやくしたといふ。

◎格言

○兄弟きやうだい既にすでに翁おきなり、和樂わらくして且かつ湛やし。 詩 經

○兄けいに宜よろしく弟ていに宜よろしく、令德れいとく壽じゆ豈がならむ。 同

○兄弟けいに友ゆうにして、克よくく政まつりごとあるに施ほす。 書 經

○棠棣たうていの華はな、鄂がくとして韓くわん々くわんたらざらんや。 凡をまそ今いまの人ひと、 同

○死喪しそうの威ゐ、兄弟けい孔けいだ懷おもふ、原隰げんしつに哀あつまるも、兄弟けい求もとむ。 同

○脊令せきれいは原げんにあり、兄弟けい急難いきげうなんす、良朋りやうほうありといへども、 同

況これ永歎えいたんす。

友 愛

○ 朋友は切々、兄弟は怡々。

○ 同聲相應じ、同氣相求む。

○ 埋木にはなさく春のなかりせば、
まぢよき枝もたれかをらまし。

論語

仲平

○ 古もたくひもあらしわがやどに、
枝をつらぬるかしはぎのかげ。

光頼

○ かつくにかたえかれぬるひとつ松、
いつまでとてかくちのこるらむ。

永福門院

○ くちのこるひと木の松のかげをこそ、
かれゆく枝もなほたのみけれ。

道意

○ 軒ちかき竹の園生のよ、の風、
つらぬる枝にふきぞつたへん。

尊胤

貞 順

婦女子の守るべき道は澤山にあるが、
その中で、貞操和順は婦徳の最も大なるものである。

女子たるものは、自分の家に居るときは、
幽閒靜淑にして、非禮の事がない様に謹み深くし、
一旦嫁して、人の妻となつた以上は、
終身貞操和順の徳を守つて、
如何なる事變に遭ふても、
決して其の徳を損ふやうな事がある
つてはならぬ。

婦女子は、男子よりも感情に強く、
従つて意志の力が微弱なものであるから、
些々たることにでも、
自分の氣に入れば、
一途に愛著心を起し、
氣に入らぬと、
どこ迄

も憎むと云ふのが、普通一般である。デあるから、一旦嫁した後も、遂に夫婦離別の悲運を招くものが、世間には仲々多いのである。

一體、夫婦の間と云ふものは、愛情が基礎となつて、成立つものであるから、淫逸にして、爲めに此の愛情を損ふ様なことがあると、決して夫婦間の和合は保たれず、延いて一家の不和を招くのである。其れ故に、人の妻たるものは、能く其の夫に對して、貞操を盡し、温き愛情を絶たない様注意せんければならぬ。

昔しから、男子は天の陽氣を稟け、女子は地の陰氣を稟けて居るのであるから、夫は外に出て活動し、妻は内にあつて扶助し、内外相和し相順じて、夫婦の道を全ふ

せんければならぬといつてあるが、成程その通り、男子と女子は性質もちがへば才能もちがつて居るものであるから、各々其の天職を盡して、一家の幸福を計ることに務めんければならぬ。若しも男女同權といふことを誤解して、夫を輕蔑し、盡すべき和順の道を守らず、貞操の徳を破るが如きは、既に婦人としての人格を備へたものと云ふことが出來ず、一家は勿論、自分一身の幸福をも得られないことになるのである。

されば婦女子たるものは、婦女の道徳を日夜に省みて家内の和合を計り、家政を整理し、夫をして後顧の憂なからしむる様に心懸けねばならぬ。些細なことに愛憎の念を逞ふして、爲めに婦徳を損じ、耻を千歳に貽すやう

なことがないやう、
注意ちゆういに注意ちゆういを加へて、
慎つしまねばならぬ。

◎初鹿野源五郎の妻の節操

貞婦ていか二夫ふに見まえずといふ事は、史傳しでんに多くおほのせてあるが、戦國せんごくの世よでは、諸侯しよこうの臣けらひで戰場せんじやうに死しんだものがある
と、その人ひとの名なを繼つがせて、敵軍てきぐんに名士めいしの死しんだものを、
知らせない様ようにはかるから、名士めいしの妻つまでも、入夫にうふさせて、
貞操ていそうを破やぶらすのを別べつに怪あやしまない。徳川とくせん家康かやすも、その一
族ぞくのうちうちに死しんだものがあると、直すぐにその弟あにに命めいじ、
兄あにの妻つまをめとらせて、やがてその名跡めうせきを繼つがしたともあ
る位くらである。しかるに甲州こうしやうに武勇ぶゆうの聞きえある初鹿野傳右はつがのでんう

衛門えもんが子こに源五郎げんごろうと云いふ者ものがあつて、武藝ぶげい勇力ゆうりき父ちちに劣ならぬ程ほどの腕うでを持もちて居ゐたが、彼かの有名ゆうめいな川中島かはなかしまの戦たたかひに遂つひに討うち死じしたのである。武田たけだ信玄しんげんは其そのの忠死ちゆうしを憐あはれみ、且かつつ源五郎げんごろう父子ふしの名なは敵國てきごくにも聞きえて、大おほに懼おそられたものであるから、然しかるべきものに其名字そのみやうじを名なのらせて、その妻つまに入いり夫かさせやうとしたが、もと傳右衛門でんうえもんは、加藤かとう駿河守すまのがみの二男になんであつたので、重縁ぢゆうえんの義ぎを以もつて、源五郎げんごろうの從弟じゆえいにあたる彌五郎やごろうを、初鹿野傳右衛門はつがのでんうえもんと改あらため、躰たがて源五郎げんごろうの妻つまに彌五郎やごろうを夫をつまにする様ように諭さしなしたのである。ところが源五郎げんごろうの妻つまは、大おほに驚おどろき、「吾夫わがつまは主君しゆくんの爲ためめに、忠死ちゆうしをとけたのに、その妻つまたるものが節義せつぎをわすれて、ドウして二度ふたひ他人たにんの妻つまとなられませう、思おもひもよらぬ事ことであります。

貞順

もしおし立て仰せられるなら、又またに伏して死んで仕舞い
 ます」と申切つたので、信立は大に怒り、「我は傳右衛門の
 武勇を愛して、その姓名を絶つまいと思へばこそ、かく
 入夫もす、めるのである。しかるを何ぞや強情を申した
 て、にくい奴である。その義ならば潔よく自殺せよとい
 った。信立の夫人は三條殿の息女であつたが、この事を
 聞いて、「貞女は二夫に見えずといふ事は、正しい人道で
 あるが、近ごろの世には、それを知るものが少い、源五
 郎の妻の如きは、昔の烈女にも耻ないものといふべきで
 ある。ドウして見殺にさせてならう」とて、信立入道にさ
 まぐ申なだめ、遂に自分の手元に召して養つたといふ
 事である。人情浮薄な今の世の婦女は、これを以て模範

とすべきである。

◎松岡女史の操行

松岡女史は、名を小鶴假號を縞衣といつたが、播磨國
 神東郡辻川村の人で、孝貞なる烈婦であつた。女史は詩
 文を善くし、かねて算筆にも達し、一子約齋が博學の評
 判を得たのも、全く女史の教養によつたのである。女史
 は明治六年十月十五日に死んだが、南望篇をだまき草
 詩歌文稿各一卷の遺著がある。女史がかつて寡となつた
 時、世間の人々が、「彼は今こそ操行を守つて居るが、後
 にはキツト醜態を演ずるであらう」といたので、女史はこ
 れを聞いて憤りにたへず、自ら誓詩を作つてこれを神祠に

掲げたといふことである。

◎王醜々自焚して辱を免かる。

王醜々は元の闕文興の妻である。陳吊の賊が反いて文興を殺した時、王醜々も亦賊の爲めに掠められて、今や辱に遇はんとした。其の時に、王氏は賊を給いていふには、「姑く僕てよ、妾が夫の屍を葬つて、それから汝等の命に従はうとて、やがて自身に薪を集めて火葬しながら、賊の油断を見濟し、行成烈火の中に飛び込んで焼死したので、賊は呆氣に取られて、其の儘に止めたといふことである。貞烈の婦とは王醜々の如きをいふのであらう。實に女鑑とすべきである。

◎松平光政の室の女訓

松平新太郎光政の室は、中務大輔本多忠利の女であつたが、容貌も麗はしく、志も亦優しく、貞順で能く婦道を守つたので、家中少しも風波が起つたことはなかつた。夫婦の間には、一人の男子と二三人の女子があつたが、夫人は平素女兒を訓へていふには、「總て女は女らしくななくてはならぬ。何事も柔順しく、自分で自分の心を制して、男に優らうと思ふてはならぬ。恒に夫を大切にしていきて、決して粗略にしてはならぬ。古の聖人も夫婦はたゞ一世の縁でないといはれた。それで其の最初に能く撰んで、一度吾夫と定めた以上は、身を慎み節を守り、夫の身の

幸ひを祈つて、苟にも夫の心に背いてはならぬ。そのうへ夫は外を治め、女は内を治むと云ふことがあるから、家内のことは些少のことまで、能く注意をして、人の妻たる道に背いてはならぬ。又嫉妬は婦女の最も慎むべき事である。ゆめくこれを忘れてはならぬ。夫に若し過失があつたら、氣にさわらぬ様靜かに之を諫めんければならぬ。あらくしく云ふのは、極めて賤しい所爲である。又富と貧とは、身の貴賤に拘はるものでないから、平生能くたしなんで、富裕であるからとて決して驕奢に流れてはならぬ。「夫の官祿に従つて、その程をはかり守れ」とは、紫女の名言である。能く女の道を守り、自分が夫に賤しめられてはならぬ」と訓戒したといふことである。

それであるから松平の兒女は成長してから、能く夫に仕へて、何れも皆美名があつたといふ。

◎義經と貞女

源義經が、元暦元年二月三日。三艸山の戦に、案内者を求めたとき、土地の人は皆逃けて居なかつたが、一人の婦人が逃げ遅れて、二人の稚子を負ひ抱へ、山路を越えて走つて行くうちに、先陣の兵卒が近づいたのにピツクリして、抱いて居つた兒童を捨て、一生懸命に走つたのである。義經は其の兒を見附け、「今汝を捨て、走つた婦人は誰か」と問へば、稚子は泣くく「我が母である」と答へた。義經は不思議に思ふて、早速彼の婦人を追捕さ

せ、「汝が背中^{せなか}に負^をふておる兒^こは兄^{あに}で、捨^すてた子^こは弟^{あに}であらう、同じ兄弟^{きやうだい}の子^こを持^もちながら、ドウして同じ様^{さま}に可愛^{あい}がらぬか、弟^{あに}の方は幼^{わか}いから兄^{あに}よりも却^{かへ}て不^ふ愍^{びん}ではな
いか」と、尋^{たづ}ねると、婦^ふ人は涙^{なみだ}を流^{なが}して答^{こた}へるには、「イカニモ御^ご不^ふ審^{しん}は尤^{もつ}もであります、捨^すてたのは妾^{わがし}の實^{じつ}子^しで、連^つれて逃^にけたのは義^ぎ利^りある兄^{あに}の子^こであります。妾^{わがし}が子^こは又^{また}も持^もたれませうが、父^ふ母^ぼに孤^{はな}れて便^たりない此^この甥^{おひ}を捨^すてるに忍^{しの}びませぬので、可^か哀^{あい}相^{そう}には思^{おも}ひましたが、弟^{あに}を捨^すて、逃^にけたのであります」といつたので、義^ぎ經^{けい}は感^{かん}涙^{なみだ}を催^{もよ}ほし、重^{かさ}ねて其^その素^す性^{じやう}を問^とへば、鷲^{わし}尾^び三^{さん}郎^{らう}常^{じやう}春^{はる}の妹^{いもうと}である^{ある}と云^いふので、痛^{いた}く其^その貞^{てい}烈^{れつ}に感^{かん}じ、劬^{いた}つて宿^{しゆく}所^{しよ}へ送^{おく}り、鷲^{わし}尾^びを呼^よび出^だして、案^{あん}内^{ない}を頼^{たの}み、且^{かつ}ついふには、晋^{しん}

齊^{せい}の大^{だい}將^{しやう}が、魯^ろの國^{こく}を攻^せめるとき、貞^{てい}烈^{れつ}な婦^ふ人^{にん}に逢^あつて、爲^ために戦^{たたか}はずして歸^{かへ}つたといふことを聞^きいたが、近^{きん}來^{らい}、無^む道^{どう}の平^{へい}家^けの者^{もの}に似^にぬ、汝^{そなた}が妹^{いもうと}の志^しは、實^{じつ}に魯^ろの國^{こく}の婦^ふ人^{にん}に勝^{まさ}つた振^{ふる}舞^{まひ}である。デ義^ぎ經^{けい}も軍^{いくさ}を止^やめたいが、勅^{ちやく}命^{めい}と云^いひ、兄^{あに}頼^{より}朝^{あさ}の下^{した}知^ちであるから詮^{せん}方^{かた}はないのである。また貞^{てい}女^{にょ}に賞^{しょう}與^いを贈^くりたいが、只^{ただ}今^{いま}與^あへる一^{いち}物^{ぶつ}もない、しかし賞^{しょう}與^いを贈^くらなくては氣^きがすまぬとて、鎧^{よろひ}一^{いち}領^{りやう}と太^た刀^{ちゆう}一^{いち}腰^{こし}を與^あへたといふことである。

◎木村重成の妻

人^{ひと}が死^しを決^{けつ}して書^{かき}置^をきをするときは、眞^{しん}情^{じやう}を披^ひ歴^{れき}して書^かくものであるから、千^{せん}載^{ざい}の後^{のち}に至^{いた}つても、讀^よむ者^{もの}をし

て凄然涙の袖をしほらしむるのであるが、彼の木村長門守の夫人眞野氏が良人の決死を悟つて、之を勵ますために、自刃した時の書置きは、實に凄絶なものである。一樹の陰一河の流れ、是他生の縁と承はり候にこそ。そもおと、せの比よりして偕老の枕をなして、只影の形に添ふがごとく、思ひ參らせ候。此頃承り候へば、此世限りの御催のよし、かけながら嬉しくまるらせ候。唐の項王とやらむは世に猛き武士なれど、虞氏の爲に名残を惜み、木曾義仲は松殿の局に別れを歎くとやら。されば世に望み窮めたる妻が身にてはせめて、御身御存生の中に最期を致し、死出の途とやらむにて奉待上候。必々秀頼公多年海山の御鴻恩、御忘却なき様頼上

まるらせ候。あらく、めで度かしく。

妻より

此の一篇の書置きを讀むものは、夫人が如何に忠節の念に深かつたか、感ぜざるものはないであらう。此の烈婦は眞野豊後守の娘で、大阪第一の美人と稱せられ、當年十八歳の花の盛りであつたといふことである。

◎三宅尙齋の妻

三宅尙齋が獄屋に繋がれるとき、其の妻に母親と二人の小供を委託し、黄金二十兩を渡して、養育の費用にするやうに言い置いた。後で妻の思ふには、良人は獄屋の中で、言ふにははれぬ辛酸を嘗めて居られるのであるか

ら、其の妻子たるものが、安然として暖衣飽食するといふは、甚だ不貞なことであるといふもので、その後、嚴寒肌を裂く冬の日も温袍を着けず、蚊虻雲の如く襲ふ夏の夜も蚊帳を釣らず、暇さへあれば人の裁縫又は洗濯などして、それで奉養したので、三年の間に、尙齋が渡した二十圓の金は毫も使はなかつたのである。それから三年経て、尙齋は赦されて家に歸つたので、其の金を出して還すと、尙齋は怒つて、「其の金が今日迄其の儘であるやうでは、キツト母子に對して奉養が缺けたであらう」といふと、妻は、留主中は斯様にして、姑を養いましたと事情をつけ、且つ此の金を使はなかつたのは、良人が出獄なさつてからの御川に備へやうと思ふて、それで其

の儘今日迄保存して置いたのであります」と答へたので、尙齋は大に其の貞烈な精神に感歎したといふことである。

◎ヂスレリー夫人の内助

ビーコンスフヒールド侯ヂスレリーが、匹夫より起つて、遂に英國の總理大臣となつたのは、勿論、侯が秀才の人物であつたからでもあるが、亦其の夫人の内助に由ること甚だ多いのである。氏が演説する時は、傍聴席に居る夫人の眼光に射られて勵まされ、又政略を考へる時は、鋭敏なる夫人の注意によつて立案したので、近世英國の大政治家は、過半夫人の内助によつて總理大臣の椅子を占めたのである。それゆゑ英國女皇陛下が、金冠

を氏に授けて子爵に擧げる時も、氏は辭退して、「臣が今日あるは臣の功でなく妻の功でありますから、ドウか妻に授けて下ださい」といつた。ソレデヂスレリー夫人は子爵夫人となり、其の良人は依然として一個の國會議員であつた。ヂスレリーは妻に後れて死んだが、當時、政敵たるグラッドストーンは氏が勳功を顯揚して、之を國葬にしようとしたが、遺族は遺言に違ふからと云つて斷つた。その遺言は、「我を、亡き妻の墓の傍に、亡き妻を葬つた時のやうにして葬れよ」といふのである。無論夫人を葬つたのは國葬でなかつたので、此の大政治家の遺骸は、略式の儘で葬られたのである。ヂ氏が夫人を思ふことは斯様に厚く、亦夫人が良人を助けたことの甚だ大なるを

も知るべきである。

◎コロンプスと其の夫人

亞米利加大陸の發見者として、芳名を宇内に輝したるコロンプスは、固より彼れが非凡の人物であることは勿論であるが、其の夫人の内助の功が亦實に多大であつたのである。西曆千四百七十年の頃、コロンプスがリスボンに住んで居た時、有名な航海者の娘フェリバを娶つたのである。フェリバは彼れが父に隨つて大洋若くは遠島に航海したことも少なくなかつた、殊に美術的の趣味があつたので、航海の地圖を畫いたり、或は航海日誌を認めたことも多かつたのである。デフェリバはコロンプス

に嫁してから、父が遺した圖書の類を悉く良人に與へ、そのうへ父から受けた航海事業の嗜好を話したりなどして、大に其志を勵ましたのである。夫婦がポルトサイドに静な生活を營んだ時、フエリバは明け暮れ良人の爲めに書物を讀み、父が多年經驗した航海術を話して、遂にコロシブスをして其の目的の爲めに非常な勇氣を起さしめたのである。コロシブスが彼の壯大な事業を企てた折など、世人より大に嘲られたが、獨り彼れに同情を表したのは、フエリバであつた。西班牙のイサベラ女王が寶玉を賣つて、コロシブスの爲めに巨船を購つたときも、獨り彼れの爲めに成功を祈つた者はフエリバであつた。然るに人生無常、月にむら雲花に風、此の憐むべきフエ

リバは遂に良夫の成功を聞かず、幾夜か西海の空を眺め明かし、其の喜ぶべき大陸發見の音信を聞かないうちに、病に罹つて永眠したといふことである。

◎格言

- 其の徳を恒にす、貞。 易 經
- 一たび之と齊すれば、終身改めず。 禮 記
- 我が心石に匪ず、轉すべからず、我が心席に匪ず、捲くべからず。 詩 經
- 堅きを曰はずや、磨して磷せず、白を曰はずや、涅して緇せず。 孔 子
- 歳寒して然る後に松柏の凋に後る、を知る。

○忠臣は二君に事へず、列女は二夫に嫁せず。

同 王 燭

○女は顔色の美なるを尊とせず、其の行ひ正しくして、徳のすぐれたるを淑とす。

○一國を安固の地に置かんと欲せば、須らく賢母を得ざるべからず。

内 訓 ナボレオン

○天は陽にして強く、地は陰にして柔かなり、陰は陽に従ひ、柔かなるは、強きに従ふこと、天地自然の道理なるが故に、夫婦の道も、天地陰陽にたとふるものなれば、女は夫に従ふこと定まれる道理なり。

女 孝 經

○親の内に居るはこれかりのやどなり、妻として夫のため、めに命をすつること人の常なり、夫れは何ゆるなれば、夫はわが家のきみなれば、わが身より重きを知ればなり。

女 小 學

○たとひ夫の家貧賤なりとも、夫を怨むべからず、天よりわれにあたへ給へる、家の貧しきは我仕合の凶しき故なりとおもひ、一度嫁してはその家を出ざるを女の道とす。

女 大 學

○婦なる者は家の由て盛衰するところ也、司馬光
○夫婦の道正しく、不邪姪戒を守るは、天地和合の義に順ずる、若し他の妻妾を奪ひ、世間の許さぬ姪事は、勿論のこと、其の定れる妻定れる妾の中にも、閨門の

内纒うちわづかに其その道みちに背そむけば、天地てんちの儀ぎに背そむくなり。

十善法語

○とゞめてもとゞめんものは人の妻つまの、そゞろに外そと出でな
すにぞありける。

最明寺

○まねぐとも尾花おはなが袖そでは心こころせよ、あらぬ荒野あれののに道みちや迷まよは
ん。

行誠

○心こころしてたてれや秋あきの女郎花をんなはな、あら野のはあらぬ風かぜもこそ
ふけ。

同

信義

人は誰たれでも立身りつしん出世しゅつせを望のぞまないものはなく、また人
たる道みちを行をこなふて天晴あつはれの者ものになりたいといふ願ねがひを持たない
ものはないが、併しかし之これを完まふしようと思おもへば、必ず朋友ほうゆう

の輔たすけを須またんければならぬ。
古來こらい英雄えいゆうと云いはれ、豪傑ごうけつといはれる程ほどの人物じんぶつには、必かなら
ず朋友ほうゆうがあつて、互たがひに相輔あひたすけ合あふたのである。管仲かんちゆうと鮑ほう
叔しゆくとの如ごとき、藤原道真ふじはらのみちざねと、藤原忠平ふじはらのただひらの如ごとき、何れも立派りっぱ
な朋友ともだちを持つて、兄弟きやうだいも雷たいならぬ交情こうじやうを結むすんで居ゐたので
ある。

俗諺こゝろわざに、馬うまは馬伴うまづれ、牛うしは牛連うしづれといふことがあるが

信義

人間と云ふものは、性來朋友を求め、情理の具はつて居るもので、婦人は婦人、男子は男子、老人は老人、小供は小供、みな其れづゝに友人があつて、共に遊び共に語つて楽しむのである、ソレデあるから親兄弟にさへ咄し難いことも、互ひに打ち明けて相談すると云ふ様に、極めて仲の好いものである。否さうなくてはならぬのである。

ところが實際世間を見渡すに、眞實心から友情を守つて居るものは、至つて少ない。幼少の頃から、竹馬の友たりしものが、一朝些細な事からして、互に感情を害し、是れまで内密に相談したことも、残らず暴露して、相互に不幸を招くやうな者が澤山あるのである。是等はツマ

リ朋友と交はるべき道を履まないから、斯様な醜態を演ずるのである。

孔子が、仁義禮智信といつて、人間の守るべき五常の徳を教へられたが、其の信義といふのは、専ら朋友と交はるべき道を示されたもので、一旦朋友の約を結んだ以上は、悪事でないかぎり、設し我れの方に不利な事があつても、其れが爲めに、友情を傷はないやうにする。又人間の境遇は、千變萬化で、順逆の定まらないものであるから、順境の時ばかりでなく、逆境に陥るときも、其れが爲めに、友誼を害するやうなことがあつてはならぬ。

友人は兄弟と違つて、直接に親族の關係はないけれど

も、同氣相求め、同聲相應じて目的を一にし、主義を同
ふして居るのであるから、全く異體同心である。異體同
心であるから、互に腹心を開いて、忠告善導し、艱難相
濟ひ、以て交情を密にし、自他の幸福を完ふせんければ
ならぬ。是れが友人の友人たる要義である。

豊臣秀吉

豊臣秀吉は、荒木村重と仲の好い友人であつたが、織
田信長が或る者の讒言を信じて、村重を殺さうとしたの
で、村重は怖れて遂に謀叛をしたが、其の時秀吉は、事
の原因は讒言から出たのであるといつて、信長に免しを
請ひ、又一方村重のところへ行つて、懇切に其の謀叛を

止めさせたのである。ところで村重は其の忠言を納れな
かつたが、其の臣の河原林と云ふ者が、秀吉を殺して、
信長の勢力を殺がうと申し出た時には、村重は其の臣に
向つて汝が言ふ事は吾の爲めに利を計ることではあるが、
しかし秀吉と我とは、斷金の交を結んで居るので、此の
度、私に諫言をするのもツマリ我が家の亡びんとするの
を不愍に思ひ、我に害心のないことを知つてをるからで
ある。夫の鳥でさへ窮して懐に入つて來れば、殺すに忍
びないものであるのに、まして朋友の信義を重んじて來
たものを殺すと云ふのは、禽獸よりも劣つた所存といは
んければならぬ。といつて、遂に秀吉に酒を飲ませ、心
持ち能く語り合つて、秀吉の歸るときには、門の外まで

信義

送つて出て、與に別を惜んだいふことである。

◎苟巨伯

晋の苟巨伯は、遠方の或る友人が病氣して居るので、態々見舞に往つた。折しも胡賊共が其の郡を攻めて居る時であつたが、巨伯は病人を其の儘にして歸る譯に行かないので、親切に介抱して居ると、彼の賊共が遣つて来て、「我が大軍が押寄せて來たので、一郡の者は残らず逃けて始末つたが、汝は男子であり乍ら、獨り此に止つて居るのは、ドウした譯か」と聞くので、巨伯は、「實は友人が病氣に罹つて居るから、之を棄て、去るに忍びない。イツソ我が身で友人の命に代る覺悟である」といふと、賊

共も彼が信義の厚いのに感心し、軍を止めて還つたといふことである。

◎回々教徒と西班牙人

數百年以前のことであるが、モロッコ人の回々教徒が、西班牙の一部分を占領して居つた時、一人の西班牙人が、回教徒の少年とはけしい喧嘩をして、圖らずも之を打ち殺して、其の場を逃げ、或る園を見出し、幸に追手に見つかからないので、壁を踰えて園の中に飛び込むと、園の主人は回教徒であつたから、庇へて下さいと頼んだ。一體回教徒は、一度食事を共にした者は、ドンナ人でも庇ふといふ習慣であつたから、園の主人は、彼の西班牙人

に安心させようと、一顆の桃を食べさせ、涼亭の中に閉じ込めて置き、夜になつてから、一層安全の場處に逃げさせてあげようと云ひ置いて、家に歸つて坐はると、同時に大勢の人が泣きつ叫びつ今西班牙人に殺された、この家の子の死骸を門口から荷込んだ。主人は見るよりビツクリして、この子を殺した者は、慥かに今我がかくまはうとする西班牙人に相違ないと云ふことを知つたが、一旦約束したことは破るまいと覺悟を定めて、誰れにも此の事を話さないで、夜になつてから、彼の涼亭に行つて、西班牙人を出し、自分の馬に騎らせて、「いかに耶穌教徒よ（西班牙人をさしている）今朝卿が手に掛けて殺した相手の者は我が子である。卿は殺人の罪を決して免る、

ことは出来ぬけれども、余と同食した縁故があるから、余は約束の言葉を守らんければならぬ。此の夜の中に早く何れへか逃れ、曉明までに安全な場處へ行かれよ、余は君に對して毛頭復讐の念を持たない。余が信義を守つて失はないのは、天が余を恵み給ふ所である」といつて別を告げたといふことである。

◎申顔

宋に申顔と云ふ人があつたが、平生も口癖のやうに、一日でも友人の無可を見なければいかぬといふので、或る人が、其のわけを尋ねると、申顔は、「イヤ別に變つたこともないが、實はあの無可は能く人の過を責める男で

あるが、一日彼れを見ないと、吾が過を聞くことが出来ぬので、それで彼れを敬慕するのである」と答へた。それほどであるから兩人の間は、至極睦じく、而も兩人とも貧寒であるので、外出する時にはタツタ一枚ある着物を、交るく着更へて出たといふことである。

◎松本順と舊恩人

松本順氏は現代我が國刀圭家の先輩であるが、氏が學生の時は、學資が乏しいので屢々困窮した。その甚しい時は三度の食事を減ずることもあつたのである。一日のこと、非常に空腹したが、身は一文の貯蓄もないので、ドウしたらよからうかと思案の結果、會ま古箱に古足袋

があつたので、喜んで、「是れ天の賜なり」といつて、直ぐに質屋に持つて行くと、番頭が驚いて、「弊店開業以來斯様な品物を手にしたことがない、實に珍事である。折角のことであるが、需に應ずることが出来ぬ」と斷つたので、松本氏は大に怒り、「汝の店は一體不都合千萬である。品物の如何に依つて、取捨すると云ふことは、甚だ不公平である」といふと、番頭も亦立腹し、互に口角泡を飛ばして喧嘩をするので、帳場に居つた主人が出て来て、無禮を謝し、「足下の言はれることは尤もである。謹んで貴君の需に應じませう、しかし此の品物はあまりよくないから、價格が少くないが、それでよろしいか」といふと、氏は「價は素より店則に據つてよろしい」と答へた。そこで主

人が天保錢一枚を渡すと、氏は大に喜び、早速焼芋を買つて、纒かに飢を充たしたのである。其の後、氏は一意専心業を勵んで、立派な刀圭家となり、松本國手の名が都下に響いた時、一人の老翁が来て診察を請ふた。デ松本氏は美しい服を着けて、診察に出ると、其の老人はギロリ／＼松本氏の顔をながめて、「失禮ですが先生は昔日の古足袋先生ではありませぬか」と尋ねるので、松本氏は「イカニモ左様である」といひ、當時の境遇を回想して、厚く其の恩を謝し、心を盡して治療し、「聊か是れで舊恩に報いた」といはれたといふことである。

◎格言

- 朋友と交り、言て信あらば、未だ學ばずといふと雖も、吾は必ず之を學たりと謂はん。 論語
- 人の爲に謀つて忠ならざるか、朋友と交りて信ならざる乎。 同
- 朋友は切々憇々兄弟は怡々。 同
- 忠告して之を善導す。 同
- 人にして信なくば、其の可なるを知らざる也。大車輓なく、小車輓なくば、其れ何を以てか之を行らんや。 同
- 信、義に近うして、言復す可き也。 同

○民信なければ立たず。

同

○善を責るは、朋友の道なり。

孟

子

○友に交はる、須らく三分の俠氣を帶ぶべし。

菜

根

譚

○同心の言、其の臭なること蘭の如し。

易

經

○志を合せて方を同じ、道を營て術を同じ、並び立て則ち

樂み、相下つて厭はず、久しく相見ずして、流言を

聞て信ぜず、其の行方に本づき義を立て、同して進み、

同からずして退く、其の交友此の如き者あり。

禮

記

○交遊は其の信を稱する也。

同

○朋友に交るには、もとより愛敬を用ゆべし、然れども

信なければ愛敬も偽より出で、誠の愛敬にあらず、

顔色をやはらげ、容貌をうやくしくするも、いつは

りかざれるは愛敬とすべからず。貝原益軒

○是世にありて、眞實の朋友を有せざる者は、恰も砂漠

の中にあるかごとく、憐れ寂莫なるものなり。

ベーコン

○舊友を捨つるなかれ、何となれば新しき友人は、到底

舊友と比すべきものにあらざればなり、新友は恰も新

酒の如し、年を経るに従ふて、味ひ益々美を加ふ。

シラク

○友人とは、凡て吾が過失失敗の時に於て、吾人を扶助

せんことを欲しつ、ある所の活動物なり。

フオスター

○偽の朋友は長脊藤のごとし、其の觸るゝところの壁を
して、腐敗せしむ、眞の朋友は新鮮なる生命を與ふ。

ボルトン

○友人の秘密を發くが如き不遜の行爲に互るなかれ。

ワシントン

仁 慈

吾々は、此の世に生れて、名自其の存在と幸福をのみ
計つてをれば、それで好い様に思はれるが、決して左様
出来ないものである。それは何故かと云ふに、吾人は此の
社會から孤立することが出来ないからである。換言すれば、
社會を離れて、單獨な生活を爲し得られないからである。

社會といふものは、固より個人が集つて出来たもので
あるが、併し石礫が集つて河原ができて居る様に、單に
集つた丈けのものではなく、そこには切つて断られぬ利
害の關係といふものがあつて、吾と人と互に相扶け相愛

しみて、相互の幸福を計らんければならぬ自然の道理があるのである。

人と交際するにも、吾から叮嚀の辭を以てすれば、他人も亦親切を以て交はるものである。此の通り、萬事萬端の上に、仁慈の心を運んで行くならば、「仁者に敵なし」如何なる人に對しても、怨みもなければ憎みもなく、猜疑の念も恐怖の感も起らず、胸中坦々として、世界を廣く渡ることが出来る。

人は自利のみで幸福な生活は得られない。衣食住一として不足のない身分であつても、仁慈の心のない人には人が懐づくものでなく、黄金の力で、一時人を使役することは出来やうが、決して人に心服させる事は出来ない。

又一朝逆境に遭つて、疾病にかゝるとか、怪我を受けるとか、又は成功と思ふた企計が失敗に歸したとか、種々な不幸が打ち續いた、めに貧苦に陥つたとかしたときに、誰も同情を以て救濟して呉れるものはなく、一生を煩悶懊惱の裡に終らんければならぬことになるのである。孟子は四端の説を立て、人は生れながらにして、仁慈の心を具へて居るものであるといつたが、なるほど人間に仁愛心のないものはなく、強慾非道の盜賊にも、尙一滴の涙はあるのであるけれども、利慾の雲に鎖されて、此の美しい生得の仁心を暗まして居るのである。恰も咬く咬たる明月が、黒雲に包まれて、其の光を放たないのと同じことである。

されば人欲の私を去り、我見我欲の念を離れて、強者は弱者を扶け、賢者は愚者を教へ、富める者は貧しき者を助け、開明の國は野蠻の國を導き、天より與へたる仁慈の美德を發揮することに勤めんければならぬ。さすれば其の仁恵を受けた者は云ふに及ばず、其の之を施した吾が心内は、無限の喜悅を以て充たされるのである。此の喜悅は萬兩の黄金を以てするも、尙且つ買ひ得ざる永久の珍寶である。

けれども此に一つの注意を要するは、受惠者の地位と能力である。仁恵を施すは固より善道なれど、其の人の地位と能力を精察せんければ、折角の仁恵も其の人の爲とならず、却て有害となる恐れがある。例せば貧困者に

物を施すにしても、實際其の人が貧困者なるか、又獨立して生活し得る能力なきか否やを吟味せず、猥りに物を恵むときは、其の人を益々懶惰物たらしむるに至るのである。故に此の點は能く注意せんければならぬ。要するに、天地は生物を以て心として居るので、吾人は其の理を受けて生れたものである。ゆゑに天地の心を以て心とし、此の心を擴充して事物に及ぼすを、仁慈の道とするのである。人たるものが苟にも此の心を失つて、利の爲めに呑噬角鬪を事としたならば、自己も幸福なる生活を遂ぐる事が出來ず、社會も亦決して平和に治まるものではない。

◎真田信之と鳥籠

信州松代の城主、真田伊豆守信之は、幼い時から學問が好きで、晝夜書見にばかり耽つたので、侍臣の者どもは、萬一幼君に病氣が起てはならぬと心配し、或る日、一人の侍臣が御前に罷り出て、慰みの爲めに、飼鳥をせられる様にお勧めすると、信之は早速承知せられたので、作事奉行を召し、鳥籠の調進を命じた。かくて四五日たつと、高サ七尺、長サ九尺、幅六尺の鳥籠が、立派に出來たので、其を信之の前に呈すると、信之は侍臣に向つて、「是れで宜しいか」と問はれるので、侍臣は奇異な問であるとは思つたが、主君のことであるから、「結構に出來

ました」と答へると、信之は再び、「其の方の氣に慚へば余も満足である」といはれた。ソコデ侍臣は、「此の籠の中に飼ふ小鳥を、早速買上げん」と申したが、信之は、「暫時小鳥を買ふことは見合したがよい」といはれた。サテ信之は右の侍臣に對し、「明日の晝食の料理獻立を調進して來いと命ぜられ、侍臣は料理の事に慣れてをりませぬからとて、再三お斷り申し上げたが、嚴命の事であるからドウすることも出來ないで、遂に獻立書を調へて信之に呈した。スルト信之は問ふて、「此の獻立は其の方の意に適するか」といはれたので、侍臣は、「仰せの通り、臣の意に適してをります」とお答へすると、信之は又た、「其の方の意に適すれば、余も亦満足である」といはれた。かくて翌日

の午の時になると、信之は料理人に命じて、昨日侍臣から差し出した獻立通りの料理を二人前こしらへさせ、先きの侍臣を召されて、「其の方の發意で作つた鳥籠であるから、其の方は先づ其の中に這入つて、様子を見よ」と命ぜられたので、侍臣は其の籠の中に這入つた。信之は又他の従者に命じて烟草盆を籠の中へ入れさせ。籠の中の侍臣に對つては、「其の中で喫烟し且つ話をせよ」と命ぜられるので、命令通り侍臣は行つて居ると、ヤガテ料理人が、二人前の馳走を運んで來たので、信之は命じて、一膳は自分の前に据へさせ、一膳は籠の中に入れさせ。ソシテ籠の中の侍臣に、「其の方は其の籠の中で、其の料理を喰へば、定めて味が佳いであらう」といはれるので、侍

臣は百方お詫を申上げたが許されないから、已むを得ず、籠の中で晝食を終へ、茶果を賜はり、二三時間も話をしたが、信之は彼れを籠の中から出される様子がないので、侍臣は大に閉口をし、出籠の命令を請ふたが、信之は斷じて許さず、「汝は籠の中で一生を終へるがよい。汝が喰ひたいと思ふものは、望みに任せて、ナンデモ差し入れてやる。汝が余に仕へる以上は、何も奉公である。籠の中に居つて、余が慰みとなるのもよいではないか」といはれたので、侍臣は大に悲み、泣いて憐みを請ふた。信之はまた、「汝は苦しいか」とはれると、侍臣は、「非常に苦しう御座ります」とお答へした。スルト信之は、「汝が左程苦しかつたら籠を出るがよい。汝を苦しめて樂むと云ふ

ことは、余が好ないのであるといはれたので、侍臣は大
 に喜んで、早速籠から出た。ソコデ信之は家臣一同を集
 め、先きの侍臣を前に坐はらせ、説諭していはれるには、
 「汝試みに考へて見よ。汝が平素居る室は、十疊敷より廣
 くはあるまい、此の鳥籠の内は、狭いとは云ふもの、
 ソレデモ三疊敷はある。然るに汝は僅か二三時間其の中
 に居つたばかりで、非常に苦しいと云ふが、彼の鳥類は
 天地の間を家とし、自由に空中を飛びまはつて、心のま
 まに食物を求めてをるものである。其を若し狭隘苦しい
 籠の中に閉ぢ込めたら、其の苦さは汝の苦さ位の話では
 ない。況して籠の中に閉ぢ込めた鳥類には、飼主がいく
 ら心を盡して、食物を遣つても、彼れが心に適ふかドウ

かわからぬ。けれども汝を籠の中に閉ぢ込むと、イツモ
 汝の好きな食物を與へ、且つ汝に何等の仕業も執らさず、
 また大小便のときは籠の外に出ることを許すのであるが、
 それでも汝は苦しいといふではないか、自分が苦しいと
 思ひながら、如何に鳥類だとして、彼れを苦しめて、自分
 の慰みとするには忍びられまい。が、しかし斯様に云つ
 たからとて、汝は決して余を恨みてはならぬ。此の節は、
 上下を通じて、飼鳥の風が流行してをるから、それで汝
 も飼鳥の悪いといふ事に氣付かずして、余に勧めたので
 あらう。余が若しも、汝が勧めたとき、直ぐに其の勧め
 を排斥したらよからうと思はれるが、夫れでは將來の功
 能が甚だ薄いから、餘儀なく汝を籠の中に入れて耻めた

のである。凡べて人の心は變り易いものであるから、余が今日は飼鳥を悪事と思ふても、後日また飼鳥をしたいと云ふ心が起らぬともいへぬ。けれども今日一たび汝を耻しめた以上は、今後決して飼鳥をしようといふ念を起すことはないであらう。又他の臣下の輩も、汝に懲りて、再び飼鳥を勧める者もないであらう。されば今日汝が、余が命に従つて、籠の中に這入つたのは、其の忠義は百の諫言に勝つてをる。ソシテ又上一人の心は即ち下萬民の心であるから、余が飼鳥を好むと、松代領内の者は、皆飼鳥を好むであらう。其の冗費と悪事は果して如何であらう。然るに余が汝を籠中に入れて、飼鳥を勧めたのを斥けたといふことが領内に聞へたなら、領内の者は皆

な飼鳥の悪事であることを知り、是れまで飼鳥して居つた者も、悉く其の鳥を放つであらう。して見ると、汝が籠の中に這入つた事は、一人で善事を萬人に教へたものである。汝は、今後余に悪事があつたら、遠慮なく諫言するがよい。併し、今日の事で余を恨むではならぬ。余は汝を以て、非常の忠臣と思ふのであると懇々説諭をせられ、賞典として若干の金子を、右の侍臣に賜はつたので、侍臣は且つ耻ぢ且つ喜び、一同の家臣は皆な其の仁政に感じたといふことである。而も當時信之は、僅か十五歳の少年であつたといふ。

◎加藤清正士卒の生命を重す

一日、加藤清正が海を渡らうとするとき、忽ち颶風に
 遇つて、船も覆没せんとしたので、船長が、「これは海の
 神が祟をするのである。若し人を海に投げ入れて、神様
 に祈つたら、此の災難は免れるであらう」と訴へると、清
 正毅然と色を正して曰ふには、「人間の生命は至つて貴重
 なもので、貴賤貧富の別はないのである。苟にも同情あ
 る人間であつたら、他人を殺して、自分が生きやうと云
 ふ様なことは、爲すに忍びられるものでない。しかし是
 非にと云ふならば、汝輩に指命するであらう」と、そこで
 水手も奮勵して船を潜いだ、稍々あつて風は止み波も
 静まつて、船中の兵卒も悉く無事を得たと云ふことであ
 る。

◎サー、ヒリップ、シドニー

ヒリップ、シドニーは英國の勇將で、詩歌の道に達し、
 文武兼ね備へた當時第一流の人物であつた。一千五百八
 十六年英吉利の軍勢が和蘭を援けて、西班牙と戦争をし
 たとき、シドニーは騎兵の隊長となつて出陣したが、敵
 の砲丸に中つて二度馬を失ひ、三度目に他の馬に乗り替
 へやうとする一刹那、自分の股を打貫かれたので、出血
 甚だしく、氣絶して陣屋に送られた。都て戦場で疵をし
 た時は、キツト咽が渴いて水を求むる者が多いが、何分
 混雜する折であるから、容易に水は得られないのである。
 シドニーも此の手疵を受けて、咽が渴いてをる様子なの

で、僅かばかりの水を持つて来た者があつた。怪我人は大悦びで、之を飲まうとする折柄、又一人の兵卒が重傷を受け、人に扶けられて其の前を通り、羨ましげにシドニーの手に持つてをる茶碗の水を睨んで行くので、シドニーは其の水を口に付けないうで、汝の渴は我よりも一層甚しいであらうと云つて、彼の兵卒に與へたといふ。かくてシドニーは此の手疵からして、三十三歳を一期として、遂に落命したのであるが、唯一杯の水を兵卒に恵んだ爲めに、彼れが美名は今日に傳はり、後世に至るまでも、世に仁惠の行いがあるかぎりには、シドニーの名の朽ることはないのである。

◎市尹ドラマンド

ジョン、ドラマンドは十八世紀の中頃、エヂンボルフの市役をつとめ、慈善家を以て世に知られた人である。ある日、エヂンボルフへ行かうと思ふて、ウエスト、ポルトと云ふ郭外を通つた時、むさくろしい小屋の戸口から、葬儀が出て、墓所の方へ行くのに出會つたので、其の様子を見ると、誰一人見送る者もなく、乞食と思はれる老人が四人、棺の前後に附いた二本の棒を擔ふてをるばかりである。ドラマンドはこれはキツト非人の葬儀であらうと思ひ、棺の側に行つて、老人に向ひ、「この死人は何者かは知らぬが、平生懇意の者もなかつたと見え、

仁 慈

葬儀を見送る人もないのは不惑であるから、我が見送の役を勤めてやらうと云つて、棺の先きに立つて、墓所の方へ行く程もなく、二人の紳士に出逢つた。この二人はかねて自分と親しい者であつたので、此の體を見て大に驚き、其の次第を聞くと、「このあはれな乞食の葬に、一人の見送もないから、我が送葬の役を勤めて居るところである」といはれ、兩人も心を動かさず、「然らば我々も其の列に加はらう」と云ふので棺に従ひ、其の先きの途中で追ひくりに人が殖えて、今は立派な行列となつて、墓所に着いた。ドラマンドは、「我は圖らずも、此の乞食の見送をしたが、コンナニ立派な葬式となつた」と云ひつゝ、自分が葬式の施主となつて、棺を穴に卸し、葬埋の儀式

も了つたところで、又彼の老人に、この死人の家内の有様を尋ねると、難澁至極の老婦が一人ありますとの答へであつた。ソコドラマンドは此の場に居合す人々に向ひ、「我々が今日此の場に集つて、此の葬儀を見送つたのは、實に不思議の因縁といふべきである。されば今又其の生残つた寡婦へも、深切を盡さなくては此の場を去り難い、ともぐくにいさ、かづ、の物を施しては如何であらう、若しさうなれば私がよきやうに取計らうといふと、何れも皆な同意して、各自幾分の出金をしたので、ドラマンドはそれを彼の寡に與へ、其の後、相當の職に就かせて、世間の危介とならず、自分で生活するやうに引き立てたといふことである。

◎名將カロシユスコ

カロシユスコは和蘭の將軍で、慈悲深い人であつた。或る時、懇意の僧へ、銘酒を贈らうとしたとき、召使の下郎に持たせたら、途中の出来心で、盗んで飲むかもわからぬと思ふて、セルトナーといふ少年を頼んで、自分の乗馬に騎らせて、之を贈らせた。少年は使の用を了え、歸宅して云ふには、「この後、馬を貸して下さるなら、貴君の財袋をも共に貸して下さい、そうでなかつたら此の馬には二度と乗りませぬ」と云つたので、それは何故であるかと尋ねると、「この馬に乗つて走る途中で、乞食が帽子を脱いで施與を求むると、其の度毎に、馬は立ち止つて其處を動かさず、何でも少し物をやらない間は、一歩も前に進まない、今日は生憎錢の持合せがなかつたので、止むを得ず、何か乞食へ與へた眞似をして馬をだまし、ヤツト其の場を抜ました」と答へた。これはカロシユスコが平生馬に乗つて、乞食に物を施したので、馬も其の習慣となつて居るのである。これを以て見ても、カロシユスコがいかに仁心に富んで居た、想像されるのである。

◎チタス皇帝

羅馬のチタス皇帝は、臣下の者に徳を施すのを、此の上ない樂みとしてをられた。ある夜、晝間の事を考へられたが、其の日は、臣下の者へ何の爲筋をもせず、又其

他の人にも、何の恵みもしなかつたことを思ひ出し、待従の人々に振向ひて、「ア、朕は今日の一日を空しく失つたよ」といはれたといふことである。吾々も日に三たび吾が身を省みて、つとみて善事を行ふべきである。

◎アルフオンソ王

シ、リ、ネーブルス(伊太利)の二州を領せられた、アルフオンソ王は、謙遜で且つ臣民を愛せらる、聞が高かつたが、嘗てシ、リ、の役に、敵から路を防がれ、軍勢は河の岸に止つて、終日食を得なかつたが、日の暮る、頃一人の兵士が、麩と乾酪の一片に蘿蔔を添へて、王の御前に持つて來た。斯る時には、何よりの珍味と思は

れそうだのに、王は其の志を厚く謝せられて、斯く多勢の軍卒が、飢を忍び勇を奮つてをるのに、余一人ドウして之を受けられやうとて、辭はられた。又ある時、キヤンバニヤと云ふ處を微行せられた時、一匹の驢馬が、泥の中に陥り、馬丁は一生懸命の力で救はふとあせつたが力及ばず、通行の人々に助を乞ふたが、誰も願る者がなかつたので、馬丁は王であることには氣が附かず、助を乞ふと、直ちに馬から下りて、馬丁と力を合せて、難なく驢馬を路の上に引き上げられた。後に馬丁は王であつたことを知り、地上に附して無禮を謝すると、王はいやく、少しも無禮ではないといはれた。是れよりして、以前臣民の中に、王に對して敵意を挾んで

仁慈

居たものも、遂に其の仁徳に服したと云ふことである。

◎趙盾一飯の恩

趙盾が以前晋の大夫であつた時、或る日、郊外に出遊する途すがら、一人の饑人を見たので、不愍に堪へず、持合した壺飧を與へて、汝は誰人かと問ふと、「私は齊の國の靈輒といふ者であります。三年間遊學して、今歸らうと思ひますが、何分旅費が盡きて食事をすることも出来ませぬ」と答へたので、趙盾もますます之を憫んで、更に食を與へると、靈輒は大に喜び、歸つてから靈公の守門の甲士と爲つたのである。その後、趙盾は或る事情からして、靈公と諍ひを始め、靈公は非常に立腹して、趙

盾を殺さうとしたのであるが、そのとき靈輒は守門の役をつとめて居るのを幸ひに、趙盾が乗つて居る車を扶けて、ヤツト其の難を免れたので、趙盾は大に喜び、深く其の恩を感謝すると、靈輒が答へていふには、「我は以前貴公に扶けられた饑人でありませぬ。彼の時、貴公から食を惠まれ、此の一命が扶かつて、斯様に守門の役をつとめて居るのであります。それゆゑ本日は聊か其の舊恩に報いたので、別に貴公の感謝を受ける譯はありませぬ」と、

◎リンコルンの涙赦免狀を潤す

米國に於ける南北戦争の最中に、一人の兵卒が軍律を犯して、死刑に處せられんとしたので、その妻は悲歎に

堪へず、如何にもして夫を救はうと、殆ど狂氣のやうになり、赤子を抱いて、大統領リンコルンの館前に至り、哀を乞はうと思つたが、當時は公私の用務が繁く、大統領の面謁を請ふものが、日夜門前に市をなしたので、三日三夜立續けたが、更に間を得ない。ソシテ一方には、夫の死刑も愈々迫つて來るので、心はいよくあせるから、四日目の夜になつて、案内も待たず、窃に戸を開けて館内に入り、或る一室に控へた。リンコルンは其れとは知らず、劇務の疲を慰めるため、暫時庭園を逍遙せんと、廊下を傳ふて出て來ると、呱呱と乳兒の啼く聲がするるので、不審の餘り、僕を呼んで何物であるかと尋ねさせるると、かくくの次第であると、哀訴の件を聞いたの

で、慈愛の念制することが出來ず、遂に自分で筆を取り、赦免狀を認めて之に與へられたが、涙痕斑々と紙面に點じ、満幅皆濕はうて居たといふことである。

◎那波活所

紀州侯は勇武絶倫の人であつたが、其の佩刀の利鈍を試めすには必ず人を以てせられたのである。或る時、侯は一口の名刀を得られた、其れは備前光長の鍛錬したものである。ソコデ例の如く罪人を執へて之を斬られた。左右の者共は、其の名刀と且つ侯の手際の立派なことを稱讚し措かなんだが、活所は獨り額を燈めて點つて居るので、侯は、「支那でも斯様な利刀と又刀を執るに妙を得

たものがあるか」と大に自慢して問はれると、活所は、「サヨウ支那でも龍泉大阿干將莫邪の如きは、有名な刀で、水陸で蛟犀虎兒を截斷し、其の利は之に譲らん程であります。又人君で人を斬殺して快としたものもありません。彼の殷の紂王や夏の桀王の輩は是れであります。吾邦にも職業として罪人を斬る者もあります、是れは穢多と云つて至つて卑しいものであります」と申し上げた。侯は暫く黙思して居られたが、や、あつて曰はれるには、「其の方の言ふことは甚だ道理である。是れまで吾はドウしてこれに氣附かなかつたであらうか」と、大に自ら省み、厚く褒賜せられたといふことである。

◎紀伊中納言治貞夜番をなす

紀伊中納言治貞が、一夜、寢所を出て、獨り藩邸を巡視し、夜番の者が弊れた衣服を着け、跣足で、拍子木を憂々と撃つて夜警してをるのを見て、「汝は暫く休憩するがよからう」といはれると、夜番は主君であることを知らないものであるから、辭退して、「夜警には法があつて、若し違ふと罪に處せられます」と答へると、治貞がいはれるには、「吾は充分其の法を存じてをる。汝は心配するに及ばぬ」と、遂に拍子木を撃つて、大に夜警を呼び、底内を一週したのである。それから明日になつて、國老を呼んで曰はれるには、「夜番の者は、風雨霜雪を冒して勤仕

を怠らない、其の勞眞に憫むべきである。これから恩恵を加へて遣らうと、毎月二百文を増加されたと云ふことである。

◎格言

○君子仁を體すれば、以て人に長たるに足る。

易

○周親ありと雖も、仁人に如かず。

書

○人の君と爲りては、仁に止まる。

大

○人の父と爲りては、慈に止まる。

同

○汎く衆を愛して仁に親しむ。

孔

○苟も仁に志せば、惡きことなき也。

同

○剛毅木訥仁に近し。

同

○己れの欲せざる所、人に施すことなかれ。

同

○博く愛する、之を仁といふ。

韓退子

○仁は天地にありては物を生ずるの心あり、人にありては、溫和にして人を愛し、物を利する心なり。仁は唯

愛の理を以て云ふべし。天道、人の道、皆此の愛を以て本とせり、愛をすて、仁をいふは非なり。

貝原益軒

○仁者は敵無し。

孟

○惻隱の心は、仁の端なり。

同

○夫れ仁は天の尊爵なり。人の安宅なり。

孟

仁慈

○仁なれば則ち榮え、不仁なれば則ち辱めらる。今辱を惡みて而して不仁に居る、是れ猶ほ濕を惡みて而して下に居るがごときなり。 孟子

○仁なる者其中心。欣然として人を愛するを云ふなり。

韓非子

○人の心となす者四徳あり、曰く仁義禮智、而して仁は包ねざるなし。 朱子

○百行萬善五常に總ぶ、五常又仁に總ぶ。 同

○仁なる者は、天地生物の心、而して人物の得て以て、心となすところなり。 同

○仁なる者は、天下の正理、正理を失ふときは、則ち序なくして而して和せず。 近思錄

近思錄

○禽獸は己を愛して、物を愛するを知らず、是れ不仁なるに由る。人の道は己を愛し、又人を愛す、是れ仁なるに因る。 貝原益軒

○人として仁ならずんば、則ち人心亡ぶ。 游氏

○人の仁あるは、木の本あるが如し。木の本あるは、幹枝の由て生ずる所なり。人の仁あるは、萬善の由て出づる所なり。 吳臨川

○道を學べば、仁を好み人を愛す。仁あれば無欲なり。無欲なれば自ら儉なり。儉も仁愛無欲より出づるの儉にあらざれば益なし。唯法に出づる者は必ず害あり。 熊澤伯繼

○積善の家には、必ず餘慶あり。積不善の家には、必ず

餘殃あり。

易

經

○ 恩を施す者は、内己を見ず、外人を見ず、即ち斗粟萬鐘の恵に當るべし。物を利する者は、己の施を計り、人の報を責む、百益と雖も、一文の功を成すことかたし。

菜根譚

○ 智者は、一切衆生の生死苦惱の大海に深く沈没するを見て、拔濟せんと欲するが爲に、悲を生ず。

優婆塞戒經

○ 利行は一法なり、普く自他を利するなり。

道元禪師

○ 世にかくてつながる、身をば救はなん、いけるを放つ神のめぐみに。

新中納言

○ 我もまたをしとこそ思へをしと思ふ、命は同じ命ならすや。行誠上人

○ 物乞ひにあたふるもの、なき時は、言の葉のみも情けあたへよ。最明寺

禮讓

昔或る處に、二疋の羊が居つて、一つの川を渡らうとしたが、其の川水は、華嚴の瀧の様に、何十丈あるか知れぬと云ふ程高い、斷崖絶壁のところ落ちて居た。ソシテ一つの橋が、其の瀧の上に架けてあつたので、二疋の羊は一時に東西から渡り初めたのである。そこで橋の中程に來ると、ピタリと衝當つて、互に押合つて居るうちに、遂に二疋共、斷崖絶壁の上から、直倒様に落ちて、あはれにも紛微塵に摧けて死んで始末つたといふ一つの話がある。

此の話は、何でもない事の様であるが、能く其の意味

を詮索して見ると、實に深い道理を云ひ表はして居るのである。それは何であるかといふに、即ち吾々人類が我欲の念を逞ふして、禮讓といふことを守らないために、遂に共々不幸なる生涯を送らんければならぬといふ意味が含んで居るのである。

毎度の事であるが、吾々人類は社會生活即ち協同生活をせなければならぬのである。ところで我意を逞ふして、唯自分一人の欲を充たすことのみを計るといふと、世の中は丸で弱肉強食の修羅場と化して始末つて、實に悲惨極まる生涯を送らんければならぬことになる。それでは折角幸福を願ひ平和を祈つても、決して得られる譯のものではない。

眞實幸福なる生活をし、平和なる生涯を送らうと思ふ
 たならば、是非共我欲を棄て、禮讓の徳を守らんけれ
 ばならぬ。設ひ自分に才能もあり、智識もあり、勢力も
 あつたにしても、其の才能、智識、勢力を恃みとせず、
 高慢をせず、成る可く社會の人に敬意を拂つて、善事を
 人に譲るといふ觀念を持たなくてはならぬ。
 古賢は、「禮は天理の節文。人事の儀則。讓は即ち禮の
 實なり」といつて居られるが、實に其の通りである。禮讓
 の徳を守ればこそ、一家も齊ひ、一國も治り、社會も平
 和になるのである。若し一日でも此の徳がなかつたなら
 ば、人々我欲を縦にして、争鬪犯亂、禽獸と毫も異なる
 ことはない。

故に人たるものは、恭敬の念を厚ふし、謙遜の徳を守
 つて、進退動止、須臾も禮讓に離れない様にせんければ
 ならぬ。かくしてこそ始めて天理人道を全ふし、萬物の
 靈長たるに愧ぢないのである。

◎山内治太夫と進士清三郎

山内治太夫と進士清三郎は、共に松平康重の臣である。
 或る時、殿戦をして退くときに、山内は亂射して一本の
 矢もなくなつたが、敵兵山縣源四郎等は、益々急を追ふ
 て來るので、清三郎は一本矢を抜いて、治太夫に投げて
 やつた。スルト治太夫は早速立ち止つて射たところが、
 其の矢は一兵の胸を貫いて、松の樹に中つたので、敵兵

共は、皆恐がつて引き去つて始末つた。山縣源四郎は、其の矢を康重のところへ送つて、「貴殿の幕下には、實に能く弓を射るものがある。敵ながら感心仕つた」といつて褒めると、康重は、其の矢に清三郎の姓名が刻んであるのを見て、是れは清三郎に相違ないといつて、ナニカ褒美を出さうとすると、清三郎は、「其れは拙者では御座らぬ、治太夫が發したのである」といふので、然らばとて、山内を呼んで問へば、「イヤ其れは拙者では御座らぬ、清三郎である」といつて、互に譲り合ふて決しないものであるから、康重は、遂に二人に褒美を與へた。ソコデ當時の人々は兩人の禮讓の徳を稱し、今の孟之反であるといつたといふことである。

◎南州翁禮義を重んず

西郷南州が蠣殻町に居つた頃、重に十四五歳以下の兒童を集めて、種々趣味のある話をして、訓育をしたので、兒童は毎月數回、時刻を定めて集まつたが、南州はイツモ彼等に「カステラ二片づ、を與へ、時としては、午餐の際、例の薩摩汁を煮て、飯を食べさせたのである。一日、兒童は例の如く、南州の宅に集つて、教を聞いて居つたが、一人の少年が、隣席の少年に與へた「カステラ」を一片取つて喰ふたので、南州は之を見て、痛く戒めたといふことである。南州は平生至つて禮義を重んじ、殊に少年の輩を教ゆるには、斯様な瑣々たる事でも、能く注意

せられたものである。

◎藤原良繩

藤原良繩は、性質は寛裕で、至つて忠孝の人であるといふので名高かつた。貞觀の初めに、正四位下左大辨となつたが、是の時に、右大辨の南淵長名と左中辨の大江山人は、良繩より下級に在つたのである。テ良繩は、私かに或る人に向つていふには、南淵と大江の二臣は、碩儒者宿であるのに、吾よりも下に居られ、吾は二賢よりも齡が少くてソシテ其の上職に居るので、朝廷に出入する際は平生も汗が流れるのである。彼の左近衛少將藤原基經は、齡は少かつたが、風骨はあり、才望は高く、時

の人も其の器を稱へ、先帝も亦其の雅量を重んじて、深く寵愛せられたが、今では吾と同じ様に四位を帯びて居るので、吾がヂツトして席に安んずることが出来ない。凡べて、少將四位を帯ぶる者があると、中將職を辭退するといふのが、古來賢者の所作である。吾は古人の如き、行爲がないにしても、其の風儀は常に敬慕して居るのであるから、吾の爲めに、賢者の昇進を塞ぐのは、吾が本意でないといつて居たが、遂に病氣が重いといふのを口實として、左大辨を辭讓したのである。ソレカラ暫くして、長名は左大辨となり、音人は右大辨となり、基繩は中將と爲つたが、良繩は右衛門督に遷されたといふことである。虚名私利を抛つて、辭讓の道を全ふしたのは、

實に千古の美德といふべきである。

◎アイザック、ニウトン

古來、博識英才の學者大先生と云はれ、世間から敬はれ、尊まれる様な人は、多く尋常の者よりも、よく禮義を知り、却つて人に謙るものである。英國利の有名な理學者アイザック、ニウトンの如きは、所謂大學者であつて、又謙退辭讓の君子といふべき人物である。彼が幼年の時、小學校で様々の細工物を作つて、見る人は其器用なのに驚かないものはなかつたといふことである。ニウトンはいつも鋸、手斧、鋸、など色々の道具を持つて居て、其れを使用することも頗る巧みであつた。其の家の

近處に風碓場があつたが、彼れは毎日見物に行つて、其の仕掛を詮索し、一々機械の動く様子も呑込むで家に歸り、自分が持つて居る小刀、鋸、手斧、金鋸杯をもつて、小さい風碓を造つたが、其の形は近隣の大な風碓と少しも違はず、大變美しい嬉器であつた。ソコデ彼れはこれを屋根の上に置いて、風の力で回したり、又小さい鼠を風碓の中へ入れて車を回さうと工夫した。其の次第は車の輪の内を箱のやうにし、上の方に小麥、米杯置いて、鼠を此の箱の内に入れると、鼠は其の麥を喰はうとして、上に昇る。スルト鼠自身の重さで輪を回はずといふ趣向である。又或る時、友人から古い箱を貰つて、水漏を造つた。水漏は水の點滴で時を計る趣向である。太さは凡そ四尺

ばかりであるが、形は尋常のものとは異りはない。水漏の頂上に、日晷の文字板を置いて、時刻の符號をつけ、指針は木の片で水の滴るにつれて上り又下るときに動くやうにして自分の室に置いて見るに、精密に時を示して一寸も違はないので、家族の人々も、いつも其の室に来て、時を見るといふ次第、ニウトンが中學校に入つた後にも珍重し、保存せられたのである。ニウトンが寄宿した室は、鳥獸、人物、船舶の圖、其他種々器械畫の形圖を、壁の一面に、木炭で書いてあつた。彼れが中學校に居た時は、専ら空氣、水、潮、日、月、星等の研究に思をこめてあつたが、一日、庭に立つて居た時、遇く頼の林檎が樹から落ちたのを見て、林檎が地に落ちるのは、

ドウ云ふ原因であらうか、林檎に落ちる力があるであらうか、又地に林檎を引き落とす力があるであらうかと、疑問を起した。尤も彼は疾くから此事について、工夫を凝らして居つたのであるが、此の時、始めて林檎の落ちるのは、大地に一種の力があつて然るのである。此の引き落とす力は、天然の理法であることを發明したのである。此の萬物が飛び去らないで、依然として地上にあるのは、此の力に引かるゝに由るのであるから、之を引力と稱へ、又萬物に重量があるのも、此の力に由るのであるから、之を重力とも稱した。ニウトンは、又萬物は其の大きさも、其の在る場所との距離の割合によつて、各々相互に引き合ふものであるといふ理を發明した。是れに依つて

月は一つの大きな世界であるが、地球の引力にひかれ、行星は太陽の引力にひかれて、はじめて月は月、行星は行星、各々其の存在を保つのであるといふ理が明かになつたので、此の發明によつて、ニウトンの名は忽ち世界學者の中に轟いたのである。又嘗て太陽の光線は、七色から成立て居るのを發明し、其の他種々の、奇異驚くべき、前代未曾有の發明をしたのである。サテかやうな大學者たるニウトンの人と爲りはドウかと云ふに、性質は極めて温和で、生涯中、殆ど一度も、怒の色を顯はしたことはなかつたといふ。ダイヤモンドといふ名の一匹の犬を愛して飼つて居つたが、ある時、要用があつて、學事をさし置いて、他出した留守に、ダイヤモンドはニウトン

の書齋に入つて、種々の紙や、書類の積んである卓の上に飛び回はり、卓上の燭臺を倒したので、忽ち紙に火が移つて、残らず焼き盡し、ニウトンが多年辛苦したのも、一時に灰煙となつて仕舞つた。やがてニウトンは歸つて書齋に入り、此の狀を見たが、別に怒る氣色もなく、此犬を撃ちもせず、只オ、ダイヤモンド、ダイヤモンド、汝は不調法をしたが、其の不調法の譯を知るまいと云つたばかりであつた。ニウトンは賢明博學であつたが、毫も其の學識に誇らず、至つて謙遜で、人に對しては、ドシナ貧しい者、賤しい者にでも、粗末にするといふことはなく、深切を盡された。固より其の時代では、ニウトンの右に出づる賢明な學者はなかつたけれども、彼れは

臨終の時に、自分が知つて居る所は、後世學ぶべき事の多いのに比べると、萬分の一にも當らないと云つた。學を好んで食を忘ると云ふことは、ニウトンの事であらう。彼れは熱心に學事を研究する時は、食事が整つたにもかまはず、三時間も過ぎてから、食卓に就いたことが屢々であつたといふことである。一千七百二十七年に、八十五歳を一期として、終に黄泉の客となつた。

◎チウリンの英人

十八世紀の中頃までは、英國人が海外に旅行することは甚だ稀れで、今日とは違つて、容易ならぬことであつた。ある一人の英人が、歐羅巴を旅行する途次、伊太利

のチウリンに行つた。一日、見物する爲め、市中を散歩して居たが、折しも練兵場から歸つて來る歩兵の一隊に逢つたので、路傍に立つて、過ぎゆく行列を眺めて居るうち、一人の若い士官は、彼の旅人の見物しておるのを見て、身振を作らばうとしたのか、わざと市街の中央の溝渠の縁を過ぎたが、誤つて足を躓いたので、溝渠の中へ落ちまいと、身をかへす途端、帽子を墮した。群集の見物人は、之を見て、大いに笑ひ、旅人も定めて可笑しく思ふたであらうと、英人の方を見た者もあつたが、案の外、此の英人は顔色もかへず、帽子のころんだ處へ走つて行き、其れを拾つて、當惑してをる士官に渡すと、士官は其の舉動に驚き、赤面の體で、其れを受けとり、

町噤に禮を陳べて、行列に追ひ就かうと急いで走つた。人々は皆な旅人の所作を譽め、互ひに耳語き合ふ間に、彼の旅人も其處を起ち去つた。此の事に就ては、双方の間に、一言の語をも交えなかつたけれども、眞實の親切心から出た、禮儀の舉動であるから、深く人々の感に徹したのである。サテ彼の士官は營所に歸つた後、事の次第を隊長へ告げ、言葉を盡して、旅人の所作を譽めたから、隊長も之は捨ておかれぬと、直ちに大將に傳へた。こんなことは露知らぬ英人は、其の夕、旅館に歸つて見ると、一人の陸軍の副將が、本陣からの使者となつて、彼の英人を迎へに來て待つて居た。英人も望外の事であるが、其の好意に任せ、暮方に、當時歐洲第一の華麗な

兵營と聞えておる、チウリンの本營に行き、大變鄭重な待遇を受けた。是からして英人の評判が高くなつて、チウリンに滯溜中、絶えず諸方より招かれて、貴顯の家に行き、出立の時は、伊太利諸州への紹介狀を受けて行つたので、さ程富裕の身でなかつたが、彼の親切なる行か

らして、當時最も盛な諸州を旅行中、至る處で身分に優つた尊敬を受け、非常に愉快な旅行をしたといふことである。

◎格言

○鼠を見るに禮あり、人にして禮なからんや、人にして禮なくば、胡ぞ過かに死せざる。 詩 經

○ 鸚鵡能く言へども、飛鳥を離れず。猩猩能く言へども、禽獸を離れず。今人にして禮なくば、能く言ふと雖も、

亦禽獸の心ならずや。 禮記

○ 凡そ人の人たる所以の者は禮儀なり。 同

○ 人に禮あれば即ち安く、禮なければ即ち危し。 同

○ 君子人を貴んで而して己を賤しむ、人を先にして而して己を後にすれば即ち民讓に作る。 同

○ 君子は恭敬擗節退讓以て禮を明にす。 同

○ 允とに恭しうて克く讓る。 書經

○ 人道は盈るを悪んで而して謙を好ず。謙は尊くして而して光り、卑くして而して躡ゆべからず。 論語

○ 一家讓なれば、一國讓興る。 大易

○ 恭禮に近づけば、恥辱に遠かる。 論語

○ 君子敬して而して失なし。人恭にして而して禮あれば、四海の内、皆兄弟なり。 同

○ 禮を知らざれば、以て立ことなき也。 同

○ 人の上をいふより科のおこるぞと、おもふて口をつしめよかし。 時頼

敏 智

人間は、餘他の動物に比べて、何れの點が勝れて居るのであるかといふに、先づ第一に、智慧の作用が優つて居るといはんければならぬ。

動物の中でも犬や、猿や、象などは仲々利巧なもので、人間の鈍根ものよりも、勝れて居るやうな分別を以てするものであるが、併し、彼等の智力は、極單純のもので、人間ほど複雑ではないから、昔から未だ象の哲學といふものも聞いたことがなく、猿の科學といふものも聞いたことがないのである。彼等に智の作用はあつても、人間程に進歩發達して居ないのである。

智慧は目のようなもので、いかに行爲の足があつても、此目がなかつたならば、一步も動くことはならぬのである。若し動いたならば、それは盲動といふので、活動とはいへぬ。されば人間として、價值のある行爲をしようと思ふたならば、是非とも此智慧を研磨かねばならぬ。

鈍くて、何の用にも立たぬから、物事に敏くて、能く機宜に當るやう、立派に仕上げねばならぬ。

しかし、智慧にも色々あつて、善い智慧もあれば、悪い智慧もある。法律に觸れない以上は、如何なる事を成しても構はんと云ふ風に、人を詐はり、欺むき、陥入れて、我利を逞ふせんとする様なのは即ち悪智慧である。白拉賊が人の巾着を切るに巧なのも即ち悪智慧である。

盗人が人の倉庫の壁に穴を穿ちて、物を盗むに巧なものも悪智慧である。智慧も善事に用ゆればよいけれども、斯様に悪事に利功なのは、真正といふことが出来ぬ。それゆゑ人たるものは、道徳を本となし、道理を砥礪となし、研磨に研磨を加へ、事々物々に接して、敏達洞徹なる様に心懸けねばならぬ。然らざれば、日々の行爲を指導することが出来ず、萬物の靈長たる價値を損ふこと、なるのである。

◎織田信長と豊臣秀吉

豊臣秀吉が、最初織田信長に仕へたときであつた。信長は、清州の城の壁が百歩ばかり壞はれて居るので、吏

に命じて、之を修覆させたが、一ヶ月経てもまだ出来上らなかつた。秀吉は此の時は未だ奴であつたが、城下を通つて其有様をながめ獨語して、「唇危いく」といふて歎けくと、信長は微かに之を聞いて、早速秀吉を呼び付けて詰問すると、秀吉は、「只今貴殿の國の東の方には、今川が居り、西の方には、齋藤、淺井、六角等の諸豪傑が居つて、毎日、此方の隙を窺つて居るのでありますが、此方では壁の修覆が未だ出来て居ないと云ふ様な安排で、備へが弛んでをるのであります。ツマリ有司等が君に忠實でないから、此の始末でありませう」といつたので、信長は、暫く點つて考へて居たが、遂に秀吉に命じて、工事を監督させた。スルト秀吉は役夫を残らず呼び寄せて、

敏智

君命であるからと云つて、酒食を與へ、役夫を十隊に分け、一隊を十歩に充て、自分で督勵したところが、タツタ二日で出来上つたので、信長は大變ビツクリして、其の敏智を褒め、俸級を増して吏としたのである。後世割普請といふことがあるのは、これから起つたといふことである。

◎徳川家康

徳川家康は、幼い時には、駿河の今川氏のところへ質となつて行つて居たのである。駿河の風俗で、端午の節句には、石を投げて戦争するといふ一つの戯があつたのであるが、其れを見物する者は、自然に黨流が分れて、

各々加勢をするのである。家康は丁度十歳のときであつたが、下僕の肩に騎つて、見物に行つて見ると、一方の隊は、三百餘人もあるのに、他の一隊は其の半分位しかなかつた。ソコで見物人は、我れを先きにと、衆い方に加勢に行つたが、家康は、其の下僕に向つて、「寡い方に行け」といつて命令するので、下僕は不思議に思ふて、其の譯を尋ねると、家康は、「多人数の者は、勢を恃みにして、心も一つにまとまらぬが、寡い方は、懼て一生懸命に働くから、勝つのは定つて居る」といつたが、果して其の通りであつたといふことである。今川義元は、此の話を聞いて、「將門には將を出すと云ふことがあるが、之れは信實である」といつたといふことである。

◎三代將軍と兩雛僧

三代將軍家光公が、或る時、品川邊に行かれたとき、東海寺の辨當所に入られて、爰で海上の風光を覽られたが、偶此の寺の小僧が兩人、御前へ罷出たので、公は沖を指さし、「彼の帆掛船を急に止めて見よ」といはれると、一人の小僧は畏まり候と、直ぐに起つて縁先きの障子を鎖じた。又一人の小僧は承はり候と、其の儘兩眼を閉ぢた。將軍は此の振舞を見て、大に感心し、兩人の敏智を稱賛し、就中、目を閉ぢた雛僧は、一入才智が勝れて居るとて、兩人に各々褒美を下されたといふことである。此の兩眼を閉ぢた小僧は、後に奥州松島瑞巖寺に入院し

て雲居といひ、活禪の名を得るに至つた高僧である。

◎魏の鄧哀王冲

魏の鄧哀王冲は、幼少の頃からして、智慧の鋭敏なことは、殆んど成人のやうであつたと云ふことである。或る時、孫權が大きな象を持つて來たので、太祖は其の斤重を知らうと思はれて、群下の者に訪はれたが、何分大きな者であるから、ドウして斤重を量つて宜いやら、其の理を申し上げる者がなかつたのである。その時、冲は、其の斤重を知る位は何でもないことである。象を大きな船に載せて、其の水痕のところへ、墨で記號をつけ、それから物を量つて、之に置いて見れば、直ぐに解かるこ

敏智

とである」といつたので、太祖は成程と感心し、早速其の通りを行つたといふことである。

◎幼年の天文學者ガセンド

佛蘭西のピーター、ガセンドは、博學賢明な人であつた、四歳の頃から、よく書を読み、自分は椅子に腰をかかけて、兄弟に向ひ、種々の教訓話をしたが、だんく成長するに及んで、山に登つたり、野邊に出たりして、日月又は星などを眺むるのを、此上ない楽しみとしたのである。七歳の時になつて、ますます天文を好み、夜中俄かに起きて、星月を眺めると云ふ様なことが間々あつたといふことである。或る夜、同じ年頃の子供と散歩してを

つたが、折しも満月が夜空に照り輝いて、斷續の雲が、彼處此處、風に吹かれて飛んで居るのを見て、あの動くのは月であらうか、また雲であらうか、と云ふ爭論が始まつた。他の小供等は、動くのは月である、雲は一處に止つて動くものではないと云つたが、獨りピーターは、月は、彼等がいふ様に、動くものではない、あの飛び走るのには雲であると諭した。けれども他の小供等は其の道理を會得しないで、やはり銘々の説を主張するので、ピーターは工夫を運らし、或る大木の下に連れて行つて、枝の間から月を見さしたところが、月は同じ枝の間にあるのに、雲は忽ち目の前を過ぎ去つて始末つたから、小供等は始めてピーターの云ふことが道理で、名自の考が

誤つて居た事を悟り、遂にピーターの説に服したといふ。

◎印度人と盗人

北亞米利加之土人が、或る日、山から家に歸つて見ると、留主中に、擔にかけて、乾して置いた、野獸の肉を盗まれたので、土人は其の場處の模様をよく取調べて、盗人の詮索に出掛け、森の中を彼方此方と徘徊する折柄、二三の樵夫に逢ふたから、「卿等は今此邊に、尾の短い小さな犬を連れた、丈の低い、年の寄つた白哲人が、短い銃を携へて通行したのを見られなかつたか」と尋ねると、いかにも其の通りの人を見たとの答に、土人は悦んで、實は其の人は吾が貯へて置いた、野獸の肉を取つた盗人

であると言すと、樵夫等は怪んで、ドウして卿はまた見たことのない人を、斯様に委しく知られたかと尋ねた。ソコデ土人の云ふには、吾が高いところに懸けて置いた肉に、盗人は手を届かせるため、石を積んで踏臺を造つて居つたから、丈の低いことは推して知れる。そのうへ森の中の落葉を見ると、其の足跡が短歩である。之れは老人の證據で、歩むときに足の先を外の方に踏み出して居るのは、白哲人の習慣で、土人なら真直に踏み出す。それから銃の短いのは、銃を寄掛けた木の皮に、筒の痕があつたのでわかり、犬の小さいのは、足跡で知れ、尾の短いのは、盗人が肉を取る間、蹲つて居た處の砂に、尾の形が付いておるので判じられたと。

◎破船の水夫

「サムファイヤ」は、濱芹の一種で、海岸に生える草であるが、潮水のとゞく處には出来ないものである。或る人は、唯此一事を知つてゐた爲めに、危い場合に身を助けたとがある。一千八百廿一年の十一月に、佛蘭西の商船が、サツセツキスの海岸、ビーチヘッドの近邊で、暴風の爲めに破船したとき、乗合の人々は、皆な舟から溺れたが、其の中只四人は、ヤット小さな岩に泳ぎ上がった。併し何分夜は眞闇で方角は分らず、今にも荒波に巻き込まれるかと思つて居る間に、その中の一人は、岩に生えた草を見出した。此草は即ち「サムファイヤ」と云ふもので、か

ねて此の草のある處へは、潮水がこないことを心得てゐたから、其の次第を外の三人へ告げ、一同漸く安心して、艱苦をこらへて待つて居たが、翌朝になつて見ると、果して陸地に近いので、遂に生命を救はれたと云ふことである。

◎畫工の僕

英吉利で名高いゼームスと云ふ畫工は、「セント、ポール」といふ大なる寺の圓頂格の裏面に繪をかくとき、高い處へ足場を架けて、毎日筆を揮つたが、ある日のこと、木閣にあがつて、自分が書いた繪を眺め、色々に工夫を運らして、覚えす知らず、少しづつ、後の方に寄り、今一

敏智

歩ほで木閣あじろの端はしから落おち、身からだ體たいも微塵みじんに碎くだけると云いふ危あやうい
 場ば合あを、傍かたはらに居ゐた召使めしつかひの僕しもべが、此この途端たんに飛とび掛かつて止とめ
 る暇いさまはないので、持もち合あした染料えのぐ皿さらを眺ながめてをる畫ゑに投な付つ
 けた。スルトゼームスは大おほに怒いかり、遽あはてて畫ゑの方ほうへ進すすみ出い
 で、こは何事なにことであるか、不ふ屈くつ者ものがと、僕しもべの粗暴そぼうを責せめた
 が、事ことの由よしを聞きいて、厚あつく禮れいを述のべ、深ふかく其その頓智どんちに感かん
 じたといふことである。此この時とき、彼かの僕しもべが、ゼームスに
 危あやういことを知しらさうと呼よびかけたら、却かえつて足あしを踏ふみは
 づして死しんだであらう。之これを助たすける手しゅ段だんは、たゞゼーム
 スに木閣あじろの縁端ふちから前まへの方ほうに進すすませるより外ほかはないから、
 主人しゅじんが千辛萬苦せんしんばんくしたる畫ゑを妄みだりに汚けがしたのも、其その時ときの良
 策さくであつたのである。瞬またく隙ひまに此この利り害がいを決けつ断だんして、其その

の事ことを行なひ、其その機きを失うしなはなかつたのは膽力たんりきのたしかな
 ものと云いはんければならぬ。臨機應變りんきおうへんの妙めうと云いはんけれ
 ばならぬ。

◎ 格言

- 或あるは王事わうじに従したがふは、知ち光くわう大だい也なり。 易 經
- 智ち仁じん勇ゆうの三みつの者ものは、天てん下かの達德たつとくなり。 中庸
- 學がくを好このむは知ちに近ちかし。 同
- 己おのれを成なすは仁じんなり、物ものを成なすは知ちなり。 同
- 知ち者しゃは惑まどはず。 論語
- 一いつを聞きて以もつて十じゅうを知しる。 同
- 賜しや始はじめて與ともに詩しを言いふべきのみ、諸これに往わうを告つひて來らいを

論語

○知る者なり。
○知者は知らざることなし、當に務むべきを之れ急となす。 孟子

○人を治めて治らざれば、其の智に反す。 同

○愚者といへども、自らその愚を知らば、遂に善慧を得るに至るべし、愚人にして自ら智と稱せば、これを愚中の甚しきものなりといふ。 佛經

○われむしろ智を守りて死し、無智を以て生きざること、たとへば、義勇の人の、むしろ勝を決せんが爲に没し、怯弱者の、活を求めて、人に制せらるゝ、がごときにあらずらん。 同

剛勇

人にして剛勇の徳を養つたならば、如何なる大事に當つても、屈せず撓まず、勇往奮進して、必ず其の道を盡すことが出来るのであるが、若も此剛勇の反對に、精神が薄弱であつたならば、如何なる小事も成遂ぐることは出来ないのである。 出来ぬ近來は、教育が盛んに行はれて、ドンナ山間僻地に行つても、學校の設けられてないところはない位である。けれども、一般に知識は發達進歩して居るのである。けれども、イクラ知識が發達して、物の道理を心得て居たからとて、人間の意志が薄弱であつたならば、決して物事は成功す

剛勇

るものではない。此れは善である。彼れは悪である。此れは爲すべき事であつて、彼れは爲すべきことでないと、物の道理は辨別して居つても、意志が薄弱な爲めに一時の利害の爲めに移されて、悪をなして善をなさず、爲すべきことを爲さずして、爲すべからざることを爲すといふ様な場合に立至るのである。

されば人は、知識を豊にして、古今内外の事理に通ずることを務むると同時に、道義の觀念を強くして、大に氣力を養成せんければならぬ。即ち一旦吾が心の中に、善と信じたることは、如何なる障礙に出會ふても、必ず貫徹せしむれば止まずといふ、大丈夫の志氣を持つのである。此の志氣あつてこそ、孟子の所謂、富貴も淫するこ

と能はず、貧賤も移すこと能はず、威武も屈すること能はず、底の物であつて、如何なる大業も必ず成就すること出来るのである。

況して世の中は、日に月に、生存競争が烈しくなつて、個人は云ふ迄も、世界の競争場裡に立て、國家の發展を計る上に於ても、幾多の難關を透過せんければならぬのであるから、國民たるものは、よろしく剛勇の氣象を養つて、平和の大敵を柝伏することに努力せんければならぬ。

◎勇敢なる泥工の子

英國のマンチエスターといふ街に、一人の日雇泥工が

剛勇

をつた。此の泥工は非常に酒が好きで、儲けた金は皆酒代に拂つて、少しも妻子の扶持を顧みないものであるから、今では一家の暮も立ちかねるといふあはれな境遇になつた。ところで今年僅かに十三歳になる長子のトムといふのは、幼い時から父について、泥工の業を助けて、忠實に働くので、年の割合には賃金を澤山に得たが、父には一錢も渡さないで、皆母の方に與へて、家の費川にしたのである。父が大酒を呑むで、外から歸り、大平樂をいふて、人々を罵り、母も子供も皆逃けてよりつかない時は、トムは父の側に行つて、言葉を和らけ、色々慰めすかして臥床に就かせるといふ有様であるから、母は一家の柱のやうに思ふて、此上もなく愛して居る。或日、

トムは頭の上に一荷泥を戴せて、高い梯を上らうとするとき、ツイ足をふみはづして、下に積んであつた、古瓦の上へ落ちたので、側に居合せた人が走り行つて見れば、腰骨をした、か打つて、惣身血汐に染み、氣絶して居るので、早速抱き起して、面に水を吹掛けたりなどして介抱したところが、漸く呼吸を吹返へして、四邊を見まはしながら、恰れな聲で、「母上はドウせられたか」と云つた。それから家に連れて歸ると、母は見るよりビツクリし、泣叫んで、マルデ狂氣のやうになつたので、トムは苦痛の顔色を見せないで、母に向ひて、「母上歎きなさるな、直ぐ全快して、又働きますから、決して心配しなさるな」といつて、外科醫が治療をする間、痛いとも、苦しいと

も、唯の一言も出さなかつたといふことである。トムは賤しい職人の子で、一字も読み書きは出来ないが、彼は勇者の列に入れて、決して耻ぢない少年である。

◎會津藩の女兵剛勇

會津の城が官軍に圍まれた時、婦人に剛勇の者が澤山居つた。髪を剪り袴を着て男子の装をなし、短兵を指揮して敵と戦ふことは屢々あつたのである。婦人が死を決したのには、却て男子よりも潔く、鬼をも欺く薩土の兵士等を者ともせず、縦横無盡に撃つてかゝつたので、かの藩士で、日頃勇士と呼ばれる者も、一太刀も支へ得ないで逃げ出した。ソコデ同藩の士が之を見て、「君は日頃の

勇氣に似ず、女に背を見せるのはドウしたことか」といふと、かの男共、「されば、大砲で打向つたらたやする業であるが、それも餘りに大人氣ないし、又短兵で戦ふとよ心凝つた女子のとあるから、勝負はおほつかない。よし勝つたとしても我々の名譽となると云ふ譯でないから、それゆゑ逃げたのである」と答へたと云ふことである。男に拘はらず、一心を込めて向ふときは、如何なる敵も抗することが出来ず、又何事も成功しないものはない。

◎高山彦九郎と強盜

高山彦九郎が、或る夜、江戸を出發して、郷里上州へ赴いたが、板橋驛に差しかゝつた頃は、ハヤ眞夜中であ

剛勇

つた。ところが橋の上に、筋骨逞しい二人の偉男子が、頭を橋の中央に並べて、足を欄干の方へ出し、一の字なりに臥て居つたので、狭い橋のことであるから、ドコか二人の身體を踏まなくては、通行が出来ないのである。ソコで彦九郎の思ふに、是れは官道である。彼等が臥てをるのは、官道を塞ぐ罪があるから、遠慮に及ばぬ、踏んで行くがよいと、一方の足で一人の頭を踏み、他方の足で他の一人の頭をふみ、悠々として通り過ぐると、二人の男子は直ぐに起き上り、大切な人の頭を土足にかけたといふもので、刀を抜いて彦九郎に斬りかけたが、彦九郎はビツクリともせず、大喝一聲咄と呼で、其の儘行き過ぎたので、二人の者は辟易して追撃しなかつた。元

來、此の二人は、強盗の巨魁で、平生部下の者共を連れて、富豪を脅迫して金財を貪るのを仕事としてをるものであるが、後捕はれて、獄屋に這入つたとき、余等は平生脅迫を仕事としたもので、左程怖しいと思ふ事に出遇はなかつたが、何日か板橋の上に伏して、通行の人を却かし、衣や財を奪はうとした際、一人の小男に出遇つたが、其の小男が目を瞋らして、我等を呵り飛ばしたときほど、怖い目に遇つた事がない。今日になつても、其の時の事を憶ひ出すと、思はず身振ひがするといつたことである。

◎大久保利通の膽勇

明治七年八月、内務卿大久保利通は、臺灣の素議を處

剛 勇

理する爲めに、清國に使したが、辯論數回、議論は容易に決せない。大久保は、一日、李鴻章を訪ねて、談話する最中に、突然大砲を放したのを聞いた。これは李鴻章が、大久保の膽力を試めさうと思ふて、私かに議政堂の前で大砲を放たしたのである。大久保は其時巻煙草に火をつけて居つたが、砲聲を聞いても毫も顔色をかへず、平然として煙草を燻らしつ、李鴻章と話を續けたので、流石の李鴻章も大久保の大膽には驚服したといふのである。

◎篠田白膠

篠田白膠壯年の頃、二三の友立と打ち連れて、夜中に、根岸の中たんほの邊を通行したとき、何者と見違へたか、

四五十の壯夫が途に要して、既に粗暴の振舞をなさんとしたので、二人の友は一命は覺束ないと思ひ、空しく彼等の手に死なんより、刀折れ力盡るまで大に闘はんと覺悟したのを、白膠が「我れに任せよといひつゝ、霹靂一聲、彼の群中に馳け入り、當るを幸ひ取つて投げ、或は蹴倒し、見るまに、三十餘人の敵を深田の中に投げ込んだので、残る敵はとても叶はぬと思つたのであらう、蜘蛛の子を散らすやうに逃げ失せた。ソコデ白膠は二人の友を顧みて、「素手で以て彼の三十餘人を同じ枕に倒したのであるが、まして三尺の劍を振へば、三百の敵は云ふに及ばぬ。もしまたかの槍術を以てすれば、三千世界に恐るべきものは一人もないのである。しかし唯恐ろし

いのは公等が小膽である、曩にもし公等の如く、三尺の秋水を抜いて彼等に向つたら、敵も亦刀を抜いてソレコソ大事になるのである。ツマリ其れは敵に刀を抜くと云ふ智恵ををしへるやうなものであるから、後日事があつても必ず大膽にならんければならぬ」といつたといふことである。凡べて一藝に達する者は、唯其の術に精しいばかりでなく、大に心膽を鍛練することが必要である。

◎大日向五郎左衛門の猛勇

加藤清正の部下に、大日向五郎左衛門といふものがあつた。生來甚だ獵が好きで、平生山野を涉獵つたが、一日、雉子打に行つたとき、遙か彼方から一匹の猪が突進

して來た。大日向は早くも之を認めて、好き獲物に出遇つたといふもので、猪の方へ向ふと、近くの谷間に居つた獵夫共が、其の様子を見て、大日向に向ひ、「早く避けよ」と叫んだが、大日向は聞かない風をして、彼の猪に飛びかかり、左右の手を猪の喉に差入れたので、猪はいよく怒つて、大日向を投げやうと狂つたが、大日向は毫も恐れず、足をシツカリ踏張つて挑み合つた。他の獵師共も次第に馳せ集り、各自に竹槍、鐵砲、斧、鎌など携へて居つても、猪の猛威に恐れて、誰一人大日向を助ける者はなく、唯「放し給へ」と叫ぶばかりであつた。かくて大日向は暫くの間猪と争つたが、勝敗は容易に定らず、猪は口中に突き込まれた指を噛み切らんともがい

て、口の兩脇から混々たる血汐を流した。けれども大日向は少しも挫けず、力のあらん限り争つたが、稍あつて猪は疲れたものと見え、少し撓んだ様に見えたので、大日向は機を見て、猪を後方に衝き倒し、難なく是を打ち取つた。大日向は自分の手を検めて見ると、左右の大指は半分噛み砕かれ、血は腕に傳はつて居るので、小高い所に腰を懸けて、砂を傷口へ塗り付け、笑つて獵師共にいふには、「我は指よりも命が大切である。我が彼の猪と取り組むだ時に、若し指を噛まれるのを恐れて、途中で其の手を抜いたら、彼れは必定我をヒひ投げたのである。ソウすると指を惜んで命を捨てる道理になる。よし一本や二本の指を取られても、十指を皆な失ふ迄には、彼れを

捻ぢ伏せねばおかんつもりであつたが、果して二本の指を失つたまで、首尾よく彼れを組み伏せたのである。是れ位の疵はナンデモないこと、心配する程のことはない、つまりらん事で朝飯時を過ぎした、サー歸つて御飯を食べやうと、仕留めた猪を負つて、家に歸つた。此の事が忽ち諸方に傳つて、誰れも大日向の猛勇を稱嘆せぬものはなかつたといふ。

◎大石良金

大石良金は主税といつて、有名な赤穂の老臣大石良雄の嫡子であるが、父に似て非常に剛毅な性質であつた。浅野家に變事が起つたときも、父と共に城を守つて居た

が、復讐の盟約が成立つてからは、母とともに、祖父の石束氏の處へ行き、後ちに山科に移たのである。時期到來して、愈々復讐するといふ日には、後門口の隊長となつて、諸勇士を指揮したのであるが、出發する以前、父の側で假寝をしたが、すこしも喧噪い様子がないので、一坐の者は皆其の沈勇なのに驚いたと云ふことである。復讐の夜には、彼の吉良義英の子義周が、出で防拒したが、良金は邀戦して遂に彼れが額と背を斬つたので、義周も支へることが出来ず、何處へか逃げ去つた。それから義士一同が凱歌を奏して、泉岳寺に憩んだとき、良金は、僧徒に戯れて云ふには、「君等は劇場の刺撃は觀ても、まだ眞劍試合を識らないだらう、今にも上杉の追手が來た

ら、此で一大決戦をして、君等が睡を覺してやらう」と、刀を舞して踊つたのである。サテ其の日の午後になると、或る者が、上杉の軍兵がやつて來たといつたので、衆人は大に喧ぎ出した。スルト良金がいふに、「上杉の方で軍兵を出すなら、キツト歸り路を追ふのである。此の日に中になつてから、殊更兵を出すと云ふことはあるまい、大方此れは浮言であらう」と、果して其の通りであつたか、その後、父に別れて、松山藩邸に捕はれることになつたが、そのとき良雄が、「謹んで平生の心得を忘れてはならぬ」と戒めると、良金は、「私は不肖ながら、數年大人の教訓を受け居りますから、今此の大節に臨んで、兒女の如く、卑劣な振舞は致しませぬ、最早之れが今生のお別れ、未

來で再び慈顔を拜するでありませうと答へて、父子一生の別を告げたが、自盡の命令が下つた日には、良金は父の書簡を刀に巻いて、坦然死に就いたと云ふことである。

◎格言

- 剛にして虚なし。 書 經
- 沈潜なるは剛克す。 同 易 經
- 君子以て獨立して懼れざれ。 同 論 語
- 勇者は懼れず。 同 論 語
- 義を見て爲さざるは勇なきなり。 同 論 語
- 内に省みて疚しからずんば、夫れ何をか憂へ何をか懼れん。 同 論 語

○發強剛毅にして、以て執ること有るに足る。

中庸

○儒は、親む可くして却すべからず、近く可くして迫るべからず、殺す可くして辱しむべからざるなり。

禮記

○事に臨むで屢々斷ずるは勇なり。 同 孟子

子

○何をか浩然の氣と謂ふ、曰く言ひ難し、其の氣たるや至大至剛、直を以て養ひ、害すること無れば、天地の間に塞つ、其の氣たるや、義と道とに配す、是れなければ餒るなり。 同

剛勇

○富貴も淫すること能はず、貧賤も移すこと能はず、威武も屈すること能はず、此れ之を大丈夫と謂ふ。

同

○敵に勝つを以て勇と爲すこと勿かれ、己れが情慾に克ち得て、始めて眞の勇者と稱すべし。トーマスブラウン

○只大人傑のみ、大瑕瑾あることを得べし。

ラ、ロシフコウルド

○人の世に處するや、骨肉の間は、大抵情を以て、理に勝ち、恩を以て、義を奪ふ、唯剛立の人能く私愛を以て、

許 衡

○眞正の才智は、剛毅の志向なり。

ナポレオン

○剛を欲せば、必ず柔を以て之を守れ、強を欲せば、必ず

弱を以て之を保て、柔を積みば必ず剛となり、弱を

子

○大人とは、強剛の決断を以て善を撰び、厳格に内外の誘惑を拒絶し、最も重き責を悦んで負ひ、困厄に遇ふて平靜なるもの是なり。

セネカ

度量

日本は東海に位する一小國であるが、今や世界の強國の中に立つて、歐米各國と肩を並べて行かねばならぬ、御世となつたのであるから、我國民は、宜しく島國的根性を脱して、大陸的頭腦を養はんければならぬ。換言すれば、度量のある國民とならんければならぬのである。度量とは、云ふまでもなく、偏頗な根性を離れて、寛裕にして能く物を容る、精神を云ふのである。由來、日本人は、身體が倭小く、従つて根性も小さく、コセ付いて居るのである。事業を起すも其規模は小さく、商法をするも小利に汲々し、何事も成功を急ぐの風があ

る。斯くの如く、小膽小量では到底大なる活動することが出来ないのである。また人と交際する上に於ても、自分の氣に合ふものは深く親愛し、自分の氣に合はぬものは極力排斥すると云ふ風である。人の上に居るものも、詔言阿諛するものは之を近づけ、逆耳の忠臣は之を遠ざけると云ふ風である。堂々たる主義があつて、互に意志の衝突をすると云ふのではなく、單に感情上に於て憎愛を擅にしてをるのが、是れが世人の常である。かくては善事を聚め、衆人を得て、偉大なる人物となることは出来ない。人心の異なることは猶ほ面の如きであるから、甲を嫌ひ乙を愛し、丙を憎みて丁を親しむと云ふが如く、人々

に對して憎愛の念を逞ふしたならば、この複雑なる社會に立つて、交際を全ふすることは出来ぬ。それかといつて甲も好し乙も好し、丙も好ければ丁も好しと云ふ風に、極端に圓滿主義に流れるのも當を得ないけれども、自己の徳を盛ならしめんとするには、或程度迄は、自己の胸襟を開いて、衆人を容るゝの度量を養はんければならぬ。況して大業を起さんとするものは、寛仁大度の精神を養つて、其の規模を大にし、小利を視ず、小功を計つてはならぬ。古人の所謂一簣の土をも譲らずして、泰山の高きをなし、一滴の水をも揀ばずして、大海の廣きをなすを思ふたならば、將來大に活動をなさんとする我國民は、須らく島國的偏頗な根性を捨て、大陸的度量を養ふべきである。しかすれば崇高偉大なる人格を完成することゝをえて、其の活動も亦必ず宏遠である。

◎高倉天皇

高倉天皇は、賢明仁孝の御方であつたことは誰も能く存じて居るのであるが、天皇の幼い時に、紅樹を獻上した者があつたので、天皇は極めて之を愛せられ、藤原の信成に命じて大切に之を守らせられた。ところが一日のこと、仕丁の一人が、信成の留主に、其の枝を剪て薪とし、酒を暖めて飲んだので、信成は歸つて、この有様を見て大に驚き、早速仕丁を縛り上げた。會々天皇は信成に其樹を奉つる様にとの命令があつたので、信成は有

度量

體に事の次第を申し上げ、全く臣の不注意より出来た
ることでありませうから、如何様にも處罰仰せつけられる
やうにと叩頭して罪を請ふた。スルト天皇は從容として、
唐詩の中に、林間煖酒燒紅葉。と云句があるが、誰か
仕丁に教へてか様な風流をさせたのかと、いはれ、別に
何等の小言をも仰せられなかつたと云ふことである。實
に是は寛量的美徳と申さんければならぬ。

◎藤原保則と盜

藤原保則は、定觀年中、備前の權ノ守と爲つたが、或
る時、安藝國の盜人が、備後の調絹を劫取して逃げ出し、
備前の石梨郡を過ぎて、逆旅の主人に問ていふには、「此の

國の太守の政績は如何様な具合であるか」と、主人は「サヨ
一府君が民を化するには、専ら仁義を用ゐられるので、
一國の人々も、盡く廉潔と爲つた」と、具さに其の治化
の本末を話すと、盜人は顔色をかへて、夜中歎息して寢
ずに居たが、夜明けになると、早速府門にいつて、自首
して、「私は不圖したことから悪心を起し、備後の官の絹
四十匹を奪ひました。實に申譯のないことを致しました
が、今過を改めて、罪に服しますから、ドウか生命丈け
を助けて下さる様にと歎願すると、保則は嚴罰するかと
思ひのほか、盜人を呼んで、「汝は自分で自分の過を改め
て、善に向ふことを知つたのであるから、最早悪人では
ない」といつて、澤山の米糧を與へ、それから賊絹を封

度量

じ、其の盗人に附して備後に送つた。ソレデ僚下の者が、
 「姦盗は恐らく備後に行かないで、途中で又變心し何れへ
 か逃走するであらう」といへば、保則は、「彼れは既に良心
 の呵責によつて改心し、今は誠の道に歸したのであるか
 ら、決して變心する様なことはない」といつたが、果して
 盗人は移文を得て、遂に備後に送つた。ソレデ備後の守
 は怪み且喜び、盗人を放免して、自分で備前に詣て、お
 禮をいつたと云ふことである。

◎酒井政親

酒井政親は、徳川家康の臣である。家康が三河に居る
 時、執事と爲つて居つたが、新參の士に、神谷某と云ふ

者があつて、或る時、途で政親に遇て、禮をしたが、政
 親は氣が付かないので、ズット行き過ぎた。其の後神谷
 は政親を見て、舉止頗る倨つて居たので、家康は其の事
 を聞いて氣嫌を悪くして居つた。最初家康が神谷に、祿
 を千石與へて居たが、此の話を聞いてから、減じて八百
 石にした。デ政親は祿を益す様に請願をしたが、家康は、
 「彼の神谷は、新參の士にも拘はらず、汝に對して無禮を
 すると云ふことである。デ私は彼の士に自分で引き下
 る様にさせやうと思ふて、故に其の祿を減じたのである。
 然るに汝は祿を益す様にと云ふのは、ドウ云ふ譯である
 か」と尋ねると、政親が答へていふには、「臣の如き不敏の
 者が、君の威靈に頼て、執事の重役を拜名してをるので